

平成20年度 慶應義塾大学体育研究所 活動報告書

特集：慶應義塾創立150年記念事業
体育研究所 新棟完成記念フォーラム



目 次

「巻 頭 言」	1
I. 特集1 慶應義塾創立150年記念事業 体育研究所 新棟完成記念フォーラム（報告）	3
II. 研究活動記録	
1. 個人研究業績・研究教育活動・研究助成	15
2. 所内定例研究会発表要旨	25
3. 浅野基金研究補助による研究成果報告	31
4. 大学体育連合中央研修会参加報告	32
5. Hiyoshi Research Portfolio 2008	35
III. 教育活動記録	
III-1. 授業の実施	
1. 平成20年度体育科目の履修者統計	39
2. 授業評価の実施	42
3. 通信教育対象科目	51
4. 他学部における体育関連授業の展開	52
III-2. スポーツイベントの開催	
1. 塾長杯・塾内競技大会	53
2. 公開講座（他）	55
IV. 特集2 新しい陸上競技場と協生館内体育施設 （室内プール・トレーニングルーム・エクササイズスタジオ）の活用について ・写真による施設の紹介と今後の活動の展開について	57
V. 業務活動記録	61

巻 頭 言

大学体育研究所

所 長 植 田 史 生

1858（安政5）年、福沢先生により蘭学教授が開始されてから150年にあたる2008（平成20）年は、本研究所にとり二つの喜ばしい出来事がありました。ひとつは3月にスポーツ棟（体育研究所・卓球場）の完成、もうひとつは8月に協生館と陸上競技場の完成です。

スポーツ棟は、研究室、講義室、会議室、測定室、実験室等が整備され所員の研究環境が改善されました。所員の皆様には、藤山記念館での2年間の苦労を忘れることなく研究業績を積み重ねていただくよう切望する次第です。

協生館には、我々の教育現場であるプール、エクササイズスタジオ、トレーニング室が併設され教育の充実が図られる事と確信しています。また、陸上競技場はフィールドが人工芝、トラックも整備され走・跳・投を中心とした陸上競技の楽しさを体験する事ができると思います。

『1939（昭和14）年、塾長小泉信三は著書「学府と学風」のなかで「塾生皆泳」が当面の理想であると記した。』と慶應義塾事典にあります。大学体育においても1960（昭和35）年に日吉プールが竣工すると、必修科目であった1993（平成5）年まで「塾生皆泳」を目標に水泳の授業が展開されていました。しかし、体育科目が選択科目になり「塾生皆泳」の実現は非常に困難になりました。また、協生館完成までの2年間はプールで行う授業は一時閉講としていました。

本研究所では、2006（平成18）年に立案した「大学体育研究所の中期構想」を具体化するべく、2007年に教育目標を掲げました。その目標実現の内容のひとつは、「総合的な水泳教育」です。このことは、多様な水辺スポーツの体験と水泳実践とともに海洋・水域での危機管理や協生行動の育成を目指すことです。すでにオープンウォータースイミング、ヨットの授業は展開していますが、2009（平成21）年度から協生館地下プールにおいて水泳の授業を再開し21世紀の新たな「塾生皆泳」を構築しようと所員一同取り組んでいます。これとともに「フィットネス教育の充実」、「ジュニア指導への取り組み」、「スポーツ文化・情報の発信」も重要な教育目標です。

2008（平成20）年6月には体育研究所新棟完成記念フォーラムを開催いたしました。午前に、「シンポジウム1 “東・京・早・慶” これからの健康スポーツ科学を考える」と題し、四大学の新進気鋭の研究者を招聘して健康・スポーツ科学研究はどのように発展していくべきか討論して頂きました。午後には、「所長講演」、「塾長講演」を挟み「シンポジウム2 慶應義塾のスポーツを考える～150年によせて～」という演題で塾内の様々な立場から体育・スポーツ教育のあり方を議論して頂きました。特に安西塾長の講演では、再三再四「塾生皆泳」の復活を提唱され、我々に対する叱咤激励をしていただいたと感じております。

最後に所長講演でも申し述べましたが、体育・スポーツを通して義塾が目指す「感動体験を基礎とした新しい教養教育」を日吉から発信できるよう所員の皆様には努力していただきますようお願い申し上げます。

I. 特集 1 :

慶應義塾創立 150 年記念体育研究所
新棟完成記念フォーラム 報告

2009年6月15日、体育研究所の新棟完成を記念し、フォーラムを行いました。当日は塾内外から82名（本研究所所員、シンポジストを除く）の方々にご参加いただきました。

午前中は本研究所長挨拶に続き、シンポジウム1「“東・京・早・慶” これからの健康・スポーツ科学を考える」を行いました。東京大学、京都大学、早稲田大学から専門分野の異なる気鋭の研究者を招聘し、各々の研究概要と今後の指針を情報交換することにより、四大学のこれからの健康・スポーツ科学研究がどのように発展していくべきかを議論しました。質疑応答では、質問者の方々の研究に対する熱意とシンポジストの深みを感じるやりとりが続き、活発な議論が展開されました。昼休みには、本研究所の研究成果ポスター掲示および動作解析実演を行いました。昼食を大学外でとる方も多く、あわただしい部分もありましたが、多くの方々が興味をもって閲覧、参加してくださいました。

午後は本研究所所長が「体育研究所の使命」というテーマで講演を行い、体育研究所の歴

史、新棟完成に至る経緯などの説明に加え、研究・教育・スポーツ振興についての考えを述べました。続いて安西塾長より、「未来先導と体育・スポーツ」というテーマのもと、慶應義塾の体育の伝統、体育研究所の役割、「塾生皆泳」のすゝめ、などに関してについて講演が行われました。

この後、150年を迎えた慶應義塾における「体育・スポーツのあり方」について塾内の様々な立場から意見を交わし、今後の体育研究所の礎にしたいという思いから企画された、シンポジウム2「慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年によせて～」が行われました。4名のシンポジストの熱のこもった講演ののち、司会者から各シンポジストへの問いかけがなされ、それに対する具体的な応答が繰り返されたことにより、有意義に終えることができました。

参考資料として、当日の写真とともに、プログラム、当日配布したシンポジウム1、シンポジウム2の趣旨説明資料を呈示します。





KEIO 150
Design the Future

150th Anniversary in 2008

体育研究所 新棟完成記念 フォーラム

2008.6.15

慶應義塾大学日吉キャンパス
スポーツ棟2階会議室

慶應義塾大学体育研究所

体育研究所 新棟完成記念フォーラム

10:00~10:05

体育研究所長挨拶

うえだ ふみお

植田史生 体育研究所長

10:10~12:10

シンポジウム 1

“東・京・早・慶”これからの健康・スポーツ科学を考える

健康科学「スポーツ科学」は学際領域に位置する言わば「融合の科学」であり、故にその研究分野も多岐に渡る。本シンポジウムでは、東京大学・京都大学・早稲田大学から専門領域の異なる気鋭の研究者を招聘し、各々の研究の概要と今後の指針を情報交換することにより、四大学のこれからの健康・スポーツ科学研究はどのように発展していくべきかを考えていく。



司会

村松

憲

体育研究所専任講師

骨格筋の適応のメカニズムとその応用 —トレーニングから先端医療まで—

いし い なお かつ
石井直方

東京大学大学院 総合文化研究科教授



1982年東京大学理学系研究科修了、理学博士。東京大学理学部動物学教室助手、東京大学教養学部(1995年より大学院総合文化研究科・生命環境科学系)助教授を経て現職。専門は筋生理学、運動・トレーニングなどの環境要因に対する筋・骨格系の適応のメカニズムを、遺伝子、細胞、個体レベルで調べ、得られた知見をもとに、新しいトレーニング法や運動システムの開発・応用を試みている。日本動物学会、日本体力医学会、日本運動生理学会、日本比較生理生化学会、日本生物物理学会、日本体育学会会員。前NSCAジャパン理事長、(社)日本ボディビル連盟指導委員長、日本パワーリフティング協会医科学委員。

筋疲労軽減のための協働筋 の活動ストラテジー

こう ざき もと き
神崎素樹

京都大学 人間・環境学研究科准教授



1999年東京大学大学院総合文化研究科修了、学術博士。東京大学大学院総合文化研究科助手を経て現職。専門は神経生理学、なぜ単純な関節運動でさえ複数の筋群の参加が必要なのかという素朴な疑問から、協働筋の機能的意義について神経生理学的・生体工学的観点から解明している。北米神経科学会、アメリカスポーツ医科学会、日本体育学会、日本体力医学会、日本運動生理学会会員。

近代スポーツとイギリス人: 社会史的観点から

いし い まさ ゆき
石井昌幸

早稲田大学 スポーツ科学部准教授



1988年早稲田大学教育学部卒業。2001年京都大学人間・環境学研究科(ヨーロッパ文化・地域環境論専攻)博士課程単位取得退学、教育学修士、広島県立大学専任講師(2001~2003年)を経て現職。専門はスポーツ史、いわゆる近代スポーツは、イギリスでいつ頃、いかにして生まれたのか、について社会史的な観点から研究している。スポーツ史学会、日本スポーツ人類学会、西洋史学会会員。

脳波筋電図コヒーレンス解析法を 用いた四肢筋群運動制御機構の 解明への試み

うし やま じゅん いち
牛山潤一

慶應義塾大学 体育研究所助教



2000年慶應義塾大学環境情報学部卒業。2005年東京大学大学院総合文化研究科修了、学術博士。専門は神経生理学、普段我々が何気なく行っている運動行動を、脳を含む神経系はどのように形成・制御しているのか、脳波や筋電図などの神経生理学的な手法から理解することを試みている。北米神経科学会、アメリカスポーツ医科学会、日本体育学会、日本体力医学会、日本運動生理学会、日本バイオメカニクス学会会員。

12:10~13:30

休憩

研究成果ポスター掲示、動作解析デモンストレーション



KEIO 150

Design the Future

150th Anniversary in 2008

13:30~13:50

所長講演「体育研究所の使命」



うえだ ふみお

植田史生 体育研究所長

14:00~14:40

塾長講演「未来先導と体育・スポーツ」



あんざい ゆういちろう

安西祐一郎 慶應義塾長

14:50~16:50

シンポジウム 2

慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年によせて～

150年を迎えた慶應義塾における「体育・スポーツのあり方」について、塾内の様々な立場から意見を交わし、今後の体育研究所活動の礎を見出したい。

司会

むらやま みつよし

村山光義 体育研究所准教授



慶應義塾のスポーツ教育

やまざき はじめ

山崎 元

慶應義塾 常任理事



1943年生まれ。1968年慶應義塾大学医学部卒業。1969年医学部助手。1977年ペンシルベニア大学心臓病学フェロー。その後、大学スポーツ医学研究センター助教授を経て1995年同教授。2008年名誉教授。1994年より1998年まで義塾高等学校長。1997年より大学スポーツ医学研究センター所長。2001年初代看護医療学部長。同年より常任理事。専門領域「心臓病学・スポーツ医学」。医学博士。

第8校舎

大学体育に期待するもの

はせやま あきら

長谷山 彰

慶應義塾大学 文学部長



1952年11月22日秋田市生まれ、仙台市に育つ。1975年慶應義塾大学法学部卒業。1979年慶應義塾大学文学部卒業。1984年同大学院博士課程単位取得満期退学。駿河台大学法学部教授を経て1997年4月より慶應義塾大学文学部教授。2001年より2005年まで慶應義塾大学学生総合センター長を務める。2007年より文学部長、斯道文庫長。日本法制史専攻。法学博士。著書に「日本古代の法と裁判」（創文社）、「律令外古代法の研究」（慶應義塾大学出版会）「新裁判の歴史」（共著）（成文堂）などがある。

教養としての身体知と体育

よこやま ちあき

横山千晶

慶應義塾大学 教養研究センター所長



慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程修了、現在法学部教授、および慶應義塾大学教養研究センター所長（2004年より）。専門は19世紀のイギリス文学・文化。教養研究センターではさまざまな研究プロジェクトを通して、次世代に伝えるべき知とは何か、そして次世代をになうリーダーシップのあり方はどうあるべきかを学部横断的に教職学生一体で模索している。現在の教養研究センターが目指す知のあり方は、座学のみならず、経験や感動を通して知の体系を切り開き、自分の頭と身体に住まわせていくと同時に、身体を使って発信していく方法である。教養研究センターではそのような「知」を身体知として、研究と実践を行っている。

体育研究所のスポーツ教育・振興策

いしで やすし

石手 靖

慶應義塾大学 体育研究所准教授



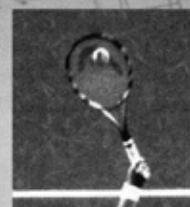
1961年（昭和36年）11月4日東京都生まれ。1984年慶應義塾大学商学部卒業。同年慶應義塾大学体育研究所助手。1990年順天堂大学大学院体育学研究科（コーチ学専攻）修士課程修了。慶應義塾大学体育研究所助教授を経て2007年より同研究所准教授。1997年塾派遣留学生として米国留学（1年間）。2000年より慶應義塾体育会副理事、2005年より慶應義塾大学体育研究所学習指導主任および学生総合センター副部長を務める。専門領域は体育方法。主な担当科目はバレーボール。ここ数年はスポーツ、文化、キャンパスライフ、地域をキーワードとして大学のできるスポーツ振興策を模索中。

「動作分析ソフトウェア・ダートフィッシュを用いた解析」

授業・指導場面において「ダートフィッシュチームプロ」の映像遅延再生・シナリオ再生機能を活用した事例を紹介。合成表示や残像表示(右写真)などの作成法もデモします。

「携帯型デジタルハイスピードカメラを用いた解析」

外部電源が取れない場所でも撮影可能な、携帯型デジタルハイスピードカメラの活用方法を紹介。実際にテニス・ゴルフ・バドミントン等の撮影&フィードバックも行う予定ですのでお気軽にご参加ください(用具は準備します)。



タイムテーブル 2008.6.15

9:30~ 受付(スポーツ棟1F コーディネートオフィス)

10:00~ 体育研究所長挨拶

10:10~ シンポジウム 1 「“東・京・早・慶”これからの健康・スポーツ科学を考える」

12:10~13:30 休憩

動作解析デモンストレーション(スポーツ棟1F 動作解析室)

研究成果ポスター掲示(スポーツ棟2F ラウンジ)

13:30~ 所長講演「体育研究所の使命」

14:00~ 塾長講演「未来先導と体育・スポーツ」

14:50~ シンポジウム 2 「慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年によせて～」

17:00~ レセプション(来往舎 ファカルティ・ラウンジ)

●お問い合わせ先

慶應義塾大学体育研究所

<http://www.hc.keio.ac.jp/ipe/>
ipeforum150@ml.keio.jp

シンポジウム 1

“東・京・早・慶” これからの健康・スポーツ科学を考える

石井直方 東京大学大学院総合文化研究科教授

「骨格筋の適応のメカニズムとその応用—トレーニングから先端医療まで—」

神崎素樹 京都大学人間・環境学研究科准教授

「筋疲労軽減のための協働筋の活動戦略」

石井昌幸 早稲田大学スポーツ科学部准教授

「近代スポーツ」とイギリス人：社会史的観点から」

牛山潤一 慶應義塾大学体育研究所助教

「脳波筋電図コヒーレンス解析法を用いた四肢筋群運動制御機構の解明への試み」

＜本シンポジウムの趣旨につきまして＞

近年、早稲田大学では「スポーツ科学部」（2003 年度より）、法政大学ではスポーツ健康学部（仮称、2009 年度より）、立教大学ではスポーツウエルネス学科（2008 年度より）、本塾では「健康マネジメント研究科」（2005 年度より）が新設されるなど、多くの大学で「健康」「スポーツ」と名の付く学部・学科が新設され始めています。このことは、大学教育はもちろんのこと、広く日本国内「健康」や「スポーツ」への関心が高まっていることを意味するのではないのでしょうか。

このような時代の流れのなかで、健康・スポーツの分野に関わる大学教員に求められていることは、授業等を通じてスポーツのすばらしさを学生に伝えることにとどまらず、人間の身体や運動、健康について、より科学的に探求し、その研究成果を世の中に発信していくことであると考えます。

「健康科学」「スポーツ科学」は、歴史学、人類学、哲学、法学、政治学、経済学、経営学、教育学、社会学、医学、生理学、生物学、栄養学、心理学、物理学、化学、工学、その他様々な学問分野をまたぐ、学際領域に位置する「融合の科学」であり、故に研究分野も多岐に渡ります。すなわち、「健康科学」「スポーツ科学」は、さまざまな専門性をもつ研究者が交流し、議論することにより、思いもよらない新たな学問領域が開拓される可能性もある、まだまだ発展の余地が多い分野であるといえるでしょう。

2007 年 12 月 25 日、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学は、大学院生が多様な教育・研究指導を受ける機会を提供し、学術発展と人材育成に寄与することを目的とし、交流協定を締結することに合意しました。健康・スポーツ科学に関しては、4 大学間で学部・学科・研究所の設置状況は異なりますが、所属を越えて、分野を越えて、広く研究交流を図っていくことは出来ないか？という思いで、本シンポジウムを企画した次第です。

このような趣旨のもと、4 大学から分野の異なる先生方にお越し頂き、研究に対する問題意識、ポリシー、具体的な研究成果等についてご講演いただきます。東京大学の石井直方先生は「筋肉」に関する最新情報を、論文・著書・マスメディア等を通じ、世界に発信し続けています。また、ボディビルディングのアジア選手権優勝、世界選手権入賞という経歴もお持ちであり、「理論と実践」を非常に高いレベルで実践しておられます。京都大学の神崎素樹先生には、「運動が長時間におよんだとき、その運動に関与する複数の筋（＝協働筋）はあたかもお互いが小休止をとるかのよう、活動を交替させる」という「活動交替」というビックリ現象について、その発現の様子やメカニズムをお話いただきます。健康・スポーツ科学では永遠のテーマであろう「疲労」に関して、神経系の視点から鋭くメスを入れていただけたと思います。早稲田大学の石井昌幸先生は、近代スポーツはイギリスでいつ頃、いかにして生まれたのか、という点について社会史的な観点から研究されています。今回は特に、狩猟スポーツの歴史から近代スポーツ史を逆照射するという大変興味深いお話をさせていただきます。本塾体育研究所からは、最若手の牛山潤一が、本塾理工学部富田牛場研究室との共同研究内容であります、運動中の脳活動と筋活動の因果関係を探る「脳波筋電図コヒーレンス」について、その解析法および最新の知見についてお話し致します。

ご来場のみなさまのお力により、本シンポジウムが、大学・学部・組織の垣根を越えた研究交流を更に促進することにつながれば、企画・運営者として最高の喜びです。



シンポジウム 2

「慶應義塾のスポーツ教育を考える ～義塾 150 年によせて～」

石手 靖	「体育研究所のスポーツ教育・振興策」	慶應義塾大学体育研究所准教授
長谷山 彰	「大学体育に期待するもの」	慶應義塾大学文学部長
横山 千晶	「教養としての身体知と体育」	慶應義塾大学教養研究センター所長
山崎 元	「慶應義塾のスポーツ教育」	慶應義塾常任理事

<趣旨>

「慶應義塾のスポーツ教育」と、かなり大きなテーマを掲げてシンポジウムを開きますが、これは我々体育研究所が 150 年を迎えた義塾において教育機関としても活発に活動し、「未来を先導する塾生」を育むべく一層の努力を続けるという自覚と決意に基づいています。ここでいうスポーツ教育とは、正課授業として行う体育科目はもとより、キャンパス内外で展開される課外活動としての塾生のスポーツ活動を含むものです。思えば、1992 年大学設置基準の大綱化がなされ、保健体育科目が全国的に選択科目に移行しましたが、これは、必修科目からの縮小化というネガティブなものではなく、むしろ大学体育教員が正課と課外（さらには地域社会）という多くの場で体育・スポーツ活動の振興を担う必要性が示された出来事であったと感じます。

現在、大綱化から 15 年余りが経ち、大学の置かれている状況も変化してきました。例えば、教育内容・質などの説明責任が社会から強く求められています。また、多様な知の創造が進む中で「教養教育」の見直しが模索されています。学生である若者に目を向けると体力の低下のみならず、メンタルヘルスの悪化やコミュニケーション能力の低下も指摘されています。少子高齢化社会に突入し、グローバル化・IT 化が加速する中で、未来を担う若者の健康問題も解決すべき課題です。近年、全国的にスポーツ・健康・福祉などに関連する学部や学科が新設されているのも、こうした背景と無関係ではないでしょう。従って、今、スポーツ教育について議論することは極めて重要であり、慶應義塾の現状に即してのそのあり方を考える必要があると考えます。今回は塾内から上記の 4 名の方にシンポジストをお願いしました。

シンポジウムの展開として、塾のスポーツ教育の理想や理念を語ることに留まらず、我々体育研究所が担うべき具体的内容に議論を発展させたいと考えています。そのため、まず、研究所の石手氏にプレゼンテーションをお願いいたしました。体育研究所は日吉キャンパス関連の 7 学部の体育科目を共通で実施するとともに、スポーツ振興として塾生のスポーツ大会の企画運営の他、講演会、施設開放、学生懇談会への協力などを行っています。大綱化以前と比較して、学部・学年・男女をすべて限定せず履修機会を設け、実施内容もより多様性を持たせることができています。しかし、履修する塾生が限られてしまう現実があり、課外活動を含めた塾生への教育機会をどのように拡大するか、といった課題を抱えています。石手氏には、体育教員としてのご自身の考えを踏まえ、今後の研究所の教育活動の可能性についてご発表いただきます。

次に、文学部長である長谷山氏には、塾生の現状を踏まえながら、学部教育の方向性から見たスポーツ教育、特にカリキュラムに存在する体育科目のあり方を中心にご意見をいただきます。また、横山氏には、義塾の教養研究センターが提唱する多様な知の創造として、身体にまつわる新たな教育としての「身体知」をキーワードに体育・スポーツ活動との関連、発展などについてご意見をいただきます。最後に山崎氏には、義塾の体育会や一貫教育校の担当理事としての立場から課外活動を含めた慶應義塾のスポーツ教育全般についてお話をいただきます。

体育や教育というものには普遍的な理念があり、その重要性は自明の理であろうかと思います。しかし、時代の流れや慶應義塾の独自性を踏まえた具体的な議論を 150 年に寄せて展開できれば幸甚です。加えて、今後の体育研究所の礎となるよう、皆様には忌憚のないご意見いただけますようお願い申し上げます。

体育研究所 村山 光義

Ⅱ．研究活動記録

1. 個人研究業績・教育業績・研究助成

植田 史生【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ Ishide Y, Ohshiro T, Ueda F, Murayama M, Ohshiro T, Fujii S, Takenouchi K, Koduma M, “The effect of GaAlAs diode laser on pre-sports warming up and post-sports cooling down”, Laser Therapy, 17(2): 69-74, 2008.

(報告書)

- ・ 植田史生, “所長講演”, 慶應義塾大学体育研究所新棟完成記念フォーラム報告書: pp35-38, 2008.

学会発表等

- ・ 吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 内山孝憲, 植田史生, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み (その2)”, 日本武道学会第41回大会, 神奈川, 2008年8月.
- ・ Ishide Y, Ohshiro T, Ueda F, Murayama M, Fujii S, Yoshida M, Takenouchi K, Koduma M, “The effect of GaAlAs diode laser on pre-sports warming up and post-sports cooling down”, International Phototherapy Association Congress, 2008.4.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・ 植田史生, “所長講演”, 慶應義塾大学体育研究所新棟完成記念フォーラム, 2008年6月.

(講師)

- ・ ドイツ剣道上級者夏季稽古会講師, 2008年8月.

(役職)

- ・ 慶應義塾創立150年記念事業委員会委員
- ・ 第32期(後期)教職員評議委員
- ・ ハーヴァード大学剣道部 剣道ヘッドコーチ
- ・ ハーヴァード大学剣道部 剣道ライフタイムディレクター
- ・ 第50回全国教職員剣道大会審判副主任

当年中の研究教育活動の概要

昨年度に続き, 日本医用レーザー研究所の協力を得て, ウォーミングアップに対する GaAlAs 半導体レーザーの影響を調べた. 今後, クーリングダウンに対する GaAlAs 半導体レーザーの影響も調査する予定である. 例年の事であるが, ハーヴァードとドイツ剣道上級者夏季稽古会において剣道指導を行った.

近藤 明彦【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ 市村操一, 近藤明彦, “散歩の文化史 (A Cultural History of Roaming)”, 東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—16: pp129-137, 2009.
- ・ 野口和行, 近藤明彦, 加藤大仁, 山内賢, “慶應義塾大学大学生のスポーツ・運動行動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp7-20, 2009.

(執筆)

- ・ 近藤明彦, “スポーツ心理学の歴史 第2次発展期 (1965～)”, 日本スポーツ心理学学会編スポーツ心理学事典: pp16-20, 大修館書店, 2008.

安藤 勝英【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・米国カリフォルニア州立サンノセ大学柔道指導, 2009年3月.

(役職)

- ・塾体育会柔道部師範
- ・東京学生柔道連盟理事

佐々木玲子【教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・奥山静代, 牛山潤一, 村松憲, 村山光義, 佐々木玲子, “若齢者における総頸動脈血管径, 内中膜複合体厚および血圧の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp1-6, 2009.

(執筆)

- ・佐々木玲子, “子どもの体力の現状と課題の理解”, 文部科学省委託 元気アップ親子セミナー事業 子どもの元気アップをサポートする指導者育成講習会 参加者用テキスト: pp19-24, (財)日本レクリエーション協会 元気アップ親子セミナープロジェクト, 2008.

(報告書)

- ・佐々木玲子, “動きの評価方法に関する学校現場等での実用性に関する調査報告”, 平成20年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告 No. IV子どもの発達段階に応じた体力向上プログラムの開発事業: pp49-53, 2009.

学会発表等

- ・佐々木玲子, 上野(一柳)智子, 三田徳明, 森下はるみ, “舞楽右方舞における基本動作のバイオメカニクスの分析”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.
- ・上野(一柳)智子, 佐々木玲子, 三田徳明, 森下はるみ, “舞楽の左右両部制に関する一考察—雅楽寮から楽所へ—”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.
- ・三田徳明, 佐々木玲子, 上野(一柳)智子, 森下はるみ, “舞楽動作の多様性とその評価について”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.
- ・中島弘子, 森田玲子, 安広美智子, 永野順子, 佐々木玲子, 森下はるみ, “中高年女性に適したダンス種目の検討”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.
- ・安広美智子, 永野順子, 佐々木玲子, 森下はるみ, “女子学生における「学校ダンス」受容と効果”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.
- ・永野順子, 佐々木玲子, 安広美智子, 森下はるみ, “スロー系ダンスが中高年女性の動的バランスに及ぼす効果”, 第19回比較舞踊学会, 東京, 2008年11月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・日本バイオメカニクス学会機関紙「バイオメカニクス研究」編集委員
- ・「子どもと発育発達」編集委員
- ・比較舞踊学会理事
- ・文部科学省委託 子どもの体力向上推進事業 元気アップ親子セミナープロジェクトメンバー
- ・文部科学省委託 子どもの体力向上キャンペーン等事業「キャンペーン標語・ポスター審査委員会」委員
- ・(財)日本レクリエーション協会 ダンス&ダンスエクササイズコンテスト審査員
- ・(財)日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 「幼少年期に身につけておくべき基本運動(基礎的動き)に関する研究」研究班員
- ・(財)日本体育協会 指導者育成専門委員会 ジュニアスポーツ指導員部会委員

- ・(財) 日本体育協会スポーツ医・科学専門委員会 協力者会議委員
- ・(財) 日本体育協会 平成20年度「国民体力テスト研究員交流事業」派遣団員
(講師)
- ・健康運動指導士養成講習会講師
- ・(財) 日本体育協会公認スポーツプログラマー養成講習会講師
- ・(財) 日本体育協会公認ジュニアスポーツ指導員養成講習会講師
- ・(財) 日本体育協会「エンジョイ・スポーツセミナー(兵庫会場)」講師
- ・(財) 山形県体育協会 山形県スポーツ指導者研修会講師
- ・特定保健指導に係る運動指導担当者研修会講師

綿田 博人【教授】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・塾体育会副理事
- ・慶應義塾高等学校硬式野球部特別招聘コーチ

松田 雅之【准教授】

学会発表等

- ・丸田巖, 松田雅之, “A 高等学校男子生徒の体力推移に関する調査研究”, 第59回日本体育学会大会, 東京, 2008年9月.

石手 靖【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Ishide Y, Ohshiro T, Ueda F, Murayama M, Ohshiro T, Fujii S, Takenouchi K, Koduma M, “The effect of GaAlAs diode laser on pre-sports warming up and post-sports cooling down”, Laser Therapy, 17(2): 69-74, 2008.

(報告書)

- ・石手靖, “体育研究所のスポーツ教育・振興策”, 慶應義塾創立150年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム報告書: pp49-51, 2008.

学会発表等

- ・Ishide Y, Ohshiro T, Ueda F, Murayama M, Fujii S, Yoshida M, Takenouchi K, Koduma M, “The effect of GaAlAs diode laser on pre-sports warming up and post-sports cooling down”, International Phototherapy Association Congress, 2008.4.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・石手靖, “体育研究所のスポーツ教育・振興策”, 慶應義塾創立150年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム(シンポジウム2 慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年によせて～), 2008年6月.
- ・塾体育会副理事, 通年.

(講師)

- ・早稲田大学オープン教育センター講師(非常勤)

(役職)

- ・バレーボール学会理事・渉外委員長

村山 光義【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Ishide Y, Oshiro T, Ueda F, Murayama M, Oshiro T, Fujii S, Takenouchi K, “The effect of GAALAS diode laser on pre-sports warming up and post-sports cooling down”. Laser Therapy 17 : 187-192, 2008.
- ・奥山静代, 牛山潤一, 村松憲, 村山光義, 佐々木玲子, “若齢者における総頸動脈血管径, 内中膜複合体厚および血圧の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48 : pp1-6, 2009.

学会発表等

- ・Murayama M, Kuwada K, Uchiyama T, Yoneda T, “New evaluation of muscle hardness by taking into account individual muscle thickness” 13th Annual congress of the European College of Sport Science, Estoril, Portugal, 2008.7
- ・吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 内山孝憲, 植田史生, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み(その2)” 第41回日本武道学会, 神奈川, 2008年8月.
- ・村山光義, “スポーツのコンディショニングにおけるレーザー適用の可能性” 第12回日本レーザー・スポーツ医科学学会, 東京, 2008年11月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・通信教育課程 地方試験講演会 広島慶友会 「身体知とは何か」 2008年10月
- ・ラジオ NIKKEI 慶應義塾の時間出演 テーマ「今, スポーツをどのように捉えるか」
2009/3/6 スポーツのなりたち, 2009/3/13 体育とスポーツ,
2009/3/20 身体知とは何だろう?, 2009/3/27 スポーツ文化の未来.

(講師)

- ・順天堂大学 スキー実習 講師 2009年2月.
- ・北里大学 スキー実習 講師 2009年2月.

(その他)

- ・慶應義塾大学教養研究センター特定研究超表象デジタル研究 ―表象文化に関する融合研究にもとづくリベラルアーツ教育のモデル構築― 研究成果報告会, “教養教育について考える”, コメンテーター, 2008年4月.
- ・慶應義塾創立 150 年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム (シンポジウム 2 慶應義塾のスポーツ教育を考える ～義塾150年によせて～), 司会・コーディネーター, 2008年6月.

(役職)

- ・バレーボール学会渉外委員
- ・大学体育連合運営委員(総務部)

研究助成等

- ・“筋収縮中の筋硬度変化による発揮筋力の推定”, 文部科学省科学研究費(基盤研究(C)) 90万円.
- ・“筋収縮中の伸張による張力増強と筋硬度の関係”, 慶應義塾学事振興資金, 125.8万円.

当年中の研究教育活動の概要

平成20年度は, 継続した研究テーマである筋硬度計測に関し, 科学研究費, 学事振興資金の補助を受け, ヨーロッパスポーツ科学会議での報告の他, データの収集等を行った. また, 教養研究センター基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究 ―4年間を見据えた教養教育に関するカリキュラム研究―」(平成19-20年度)の幹事として, 主に成績評価方法の改善に関するセクションに取り組み, 報告書作成(平成21年度発刊予定)に携わった. さらに, 体育研究所新棟完成記念フォーラムにおいては, シンポジウムのコーディネーターとして今後のスポーツ教育に関する討論を企画し, 実行した.

山内 賢【准教授】

著書・論文・報告書

(論文)

- ・小林勝法, 森田啓, 奈良雅之, 山内賢, 柳田泰義, 田中博史, 平田智秋, “大学体育のFD活動に関する意識と実態調査結果報告”, 大学体育92: pp131-135, 2008.
- ・野口和行, 近藤明彦, 加藤大仁, 山内賢, “慶應義塾大学大学生のスポーツ・運動行動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp7-20, 2009.

(報告書)

- ・山下香枝子, 小林正弘, 茶園美香, 新藤悦子, 中野裕子, 廣岡佳代, 厚東篤生, 山内賢, “自宅生活復帰型・機能回復システムの研究開発—自宅のできる運動プログラムの開発と実践およびその効果”, 文部科学省ハイテク・リサーチセンター整備事業平成18年度研究成果報告書: pp71-80, pp223-235, 2008.
- ・太田喜久子, ラウ優紀子, 山内賢, 川喜田恵美, “虚弱高齢者の日常生活行動活性化を目指した施設と在宅を結ぶケアシステムの開発”, 文部科学省ハイテク・リサーチセンター整備事業平成19年度研究成果報告書: pp53-58, pp285-290, 2009.

学会発表等

- ・山内賢, ラウ優紀子, 太田喜久子, 川喜田恵美, 秋葉茂季, “介護予防策としての健康増進プログラムの立案—スティックウォーキングを介護予防運動として導入する可能性—”, 第63回日本体力医学会大会, 別府, 2008年9月.
- ・山内賢, 秋葉茂季, 市河勉, ラウ優紀子, 川喜田恵美, 太田喜久子, “介護予防策としての健康増進プログラムの立案—スティックウォーキング導入の留意点—” 第67回日本公衆衛生学会総会, 福岡, 2008年11月.
- ・ラウ優紀子, 山内賢, 太田喜久子, 川喜田恵美, “虚弱高齢者の歩行能力を維持するケア力を高めるための取組み”, SFC Open Research Forum 2008, 東京, 2008年11月.
- ・ラウ優紀子, 太田喜久子, 山内賢, “高齢者の歩行能力維持・向上を目指した援助技術へのウォーキングポール導入の実現可能性に関する調査”, 第28回日本看護科学学会学術集会, 福岡, 2008年12月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・健康増進運動指導士講習会講師 (トレーニングの基礎理論, 中高年の健康安全管理とトレーニングの指導計画) 2008年9月.

(役職)

- ・大学体育連合 FD 推進部委員
- ・大学体育連合 資格制度検討委員

当年中の研究教育活動の概要

高齢者が自宅で安心して暮らしていくためには, セルフケア能力を維持することが一番である. そのためには, 高齢者に対して, 自己の生活活動能力に合った運動実施と継続をよびかけ, 介護状態にならないように, 自発的で楽しい身体活動のプログラムを構築する必要があると考えられる. 近年の研究テーマは, 高齢者が安全に行える運動プログラムの創造である. 本年度は高齢者にノルディックウォーキングを行わせ, 1ヶ月間の運動効果を通常歩行と比較してみた. この運動は, 高齢者の体力維持への貢献度として, 歩行能力の他に握力と柔軟性の向上にも関与することがわかった.

吉田 泰将【准教授】

著書・論文・報告書

(執筆)

- ・吉田泰将, “体験! 救急救命・CPR+AED の実際”, 慶應義塾大学教養研究センター編「極東証券寄附講座 誕生と死—生命の教養学IV」pp225-233, 慶應義塾大学出版会.
- ・吉田泰将, “スポーツ・テーピングの実際”, 財団法人全日本剣道連盟編「剣道・社会体育教本「改訂版」

pp233-237, 財団法人全日剣道連盟.

(報告書)

- ・ 笹月繁, 吉田泰将, “(財) 全日本剣道連盟の現状報告―連盟事務局―”, 第 50 回全国教職員剣道大会記念号 pp71-72.
- ・ 吉田泰将, “極東証券寄附講座『生命の教養学』誕生と死―その間にいる君たちへ”, 慶應義塾大学教養研究センター報告書 pp48-49, 2007.

学会発表

- ・ 吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 内山孝憲, 植田史生, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み (その 2)”, 日本武道学会第41回大会, 神奈川, 2008年 8 月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・ 財団法人全日本学校剣道連盟 常務理事
- ・ 財団法人全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会 講師
- ・ 全日本学生剣道連盟総務委員会委員
- ・ 全日本学生剣道連盟・関東学生剣道連盟 審判員
- ・ 関東学生剣道連盟将来構想委員会委員
- ・ 全日本学連剣友会事務局 通年
- ・ 関東学連剣友連合会事務局長 通年
- ・ 塾体育会剣道部 (三田剣友会) 助教
- ・ 塾医学部体育会剣道部 師範代行
- ・ 日本武道学会第41回大会 事務局長
- ・ 財団法人全日本学校剣道連盟 創立50周年記念第50回全国教職員剣道大会総務副委員長
- ・ 財団法人全日本学校剣道連盟 創立50周年記念 表彰状・功労賞
- ・ 財団法人全日本剣道連盟 剣道八段審査合格 (11月25日・日本武道館)

当年中の研究教育活動の概要

昨年から継続して, スポーツ技術向上に寄与する指導プログラムの開発を課題として, 加速度センサを用いた剣道竹刀の素振りスピード評価システムと映像の即時フィードバックによる技術指導の効果について検討を行った.

加藤 大仁【准教授】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ 加藤大仁, “スポーツ振興法の立法過程”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: 21-28, 2009.
- ・ 野口和行, 近藤明彦, 加藤大仁, 山内賢, “慶應義塾大学大学生のスポーツ・運動行動に関する実態調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp7-20, 2009.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・ 平成20年度日本体育協会公認スポーツ指導員養成講習会 専門科目 (バスケットボール) 講師

野口 和行【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・ 野口和行, 近藤明彦, 加藤大仁, 山内賢, “大学生のスポーツ・運動行動に関する調査”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp7-21, 2009.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・(社) 日本キャンプ協会キャンプディレクター 2 級講習会講師 2008年 7 月.
- ・(社) 日本キャンプ協会キャンプディレクター 2 級講習会講師 2008年10月.
- ・(財) 日本教育科学研究所アウトドアゲーム指導法講習会講師 2008年10月.
- ・(社) 日本キャンプ協会キャンプディレクター 1 級講習会講師 2008年11月.
- ・(社) 日本キャンプ協会キャンプディレクター 2 級講習会講師 2009年 1 月.

(役職)

- ・(社) 日本キャンプ協会専門委員
- ・(財) 日本教育科学研究所研究員
- ・大学スケート研究会副理事長

須田 芳正【専任講師】

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

- ・ Assistant Coach, Bloemendaal U-14 Team (Hoofdklasse KNVB West 1)

当年中の研究教育活動の概要

塾派遣留学制度によりオランダに留学中.

オランダサッカー協会の指導者講習会に参加し, Uefa B ライセンスの取得を目指す.

村松 憲【専任講師】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・奥山静代, 牛山潤一, 村松憲, 村山光義, 佐々木玲子, “若齢者における総頸動脈血管径, 内中膜複合体厚および血圧の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp1-6, 2009.

(報告書)

- ・梅林薫, 小屋菜穂子, 村松憲, 北村哲, 平岡珠美, 櫻井隼人, 井上直子, 村上貴聡, “ジュニアテニス選手の体力特性と体力トレーニングの開発に関する研究”, 国立スポーツ科学センター (JISS) 平成20 (2008) 年度委託研究.

学会発表等

- ・ Kai M, Ozawa S, Muramatsu T, “Event Detection Based on Non-broadcasting Video for the Analysis of Doubles Match of Tennis”, Computer Vision Winter Workshop 2009, Eibiswald, Austria, 2009.2.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(役職)

- ・財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ (情報, 戦略スタッフ)
- ・財団法人日本オリンピック委員会 強化スタッフ (医・科学スタッフ)
- ・財団法人日本テニス協会 強化本部・スポーツ科学委員
- ・日本テニス学会運営委員

(その他)

- ・慶應義塾創立 150 年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム (シンポジウム 1 “東・京・早・慶” これからの健康・スポーツ科学を考える), 司会・コーディネーター, 2008年 6 月.

当年中の研究教育活動の概要

2008年度の前半は, 本研究所の新棟完成記念フォーラムの企画, 運営に携わった. また, 年度を通じて, 授業, 体育会への映像フィードバック導入を試みた. 特に本年度は, ハイスピードカメラを導入し, より詳細なフィードバックを行うことができた. また, 日本テニス協会スポーツ科学委員として, 日本代表選手の映像撮影, フィードバック, 体力測定項目の選定等のサポートを行った. これまで主としてテニスを対象とした映像フィードバックを行ってきたが, 2009年度は幅広い種目に対して導入を試みたい.

加藤 幸司【専任講師（有期）】

学会発表等

- ・吉田泰将, 村山光義, 加藤幸司, 内山孝憲, 植田史生, “加速度センサを用いた竹刀剣先速度評価システム開発の試み（その2）”, 日本武道学会第41回大会, 神奈川, 2008年8月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

- ・平成20年度財団法人日本バドミントン協会公認コーチ養成講習会後期専門科目（バドミントン2級）講習会 講師 2008年1月.

(役職)

- ・塾体育会バドミントン部スーパーバイザー, 通年.

研究助成等

- ・“バドミントン選手の動きの特徴に関する研究”, 慶應義塾学事振興資金（個人研究A）, 30万円.

奥山 静代【専任講師（有期）】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・奥山静代, 牛山潤一, 村松憲, 村山光義, 佐々木玲子, “若齢者における総頸動脈血管径, 内中膜複合体厚および血圧の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要47: pp1-6, 2008.
- ・Yoshizawa M, Shimizu-Okuyama S, Kagaya A, “Transient increase in femoral arterial blood flow to the contralateral non-exercising limb during one-legged exercise”, Eur J Appl Physiol 103: 509-14. 2008.
- ・Kagaya A, Ohmori F, Okuyama S, Muraoka Y, Sato K “Blood flow and arterial vessel diameter change during graded handgrip exercise in dominant and non-dominant forearms of tennis players”, Adv Exp Med Biol (in press).

(報告書)

- ・奥山静代, “運動時の心拍出量の変化と各種血管への血流配分”, Integrative study of circulatory regulation during exercise ; contribution to developing optimal program for health promotion and physical fitness through sports and exercise 2008. (印刷中).

学会発表等

- ・奥山静代, 大森芙美子, 佐藤耕平, 加賀谷淳子 “足底屈運動における心拍出量と膝窩動脈血流量の関係” 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・大森芙美子, 佐藤耕平, 奥山静代, 加賀谷淳子 “運動終了直後の動脈血流加速と静脈血流減速の時間的關係” 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・定本朋子, 佐藤耕平, 笹原千穂子, 澁谷顕一, 加茂美冬, 斎藤満, 長田卓也, 奥山静代, 加賀谷淳子 “セントラルコマンドが静的運動時の腎動脈血流調節に及ぼす影響” 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・佐藤耕平, 上田千穂子, 澁谷顕一, 奥山静代, 加茂美冬, 長田卓也, 斎藤満, 加賀谷淳子, 定本朋子 “セントラルコマンドが静的運動時の脳血流調節に及ぼす影響” 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・澁谷顕一, 上田千穂子, 佐藤耕平, 奥山静代, 斎藤満, 加賀谷淳子, 加茂美冬, 長田卓也, 定本朋子 “セントラルコマンドが脳酸素化動態に及ぼす影響” 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・大森芙美子, 奥山静代, 村岡慈歩, 森曜生, 鈴木早紀子, 水村真由美, 加賀谷淳子 “最大位までの多段階ストレッチングが筋の循環に与える影響” 第15回医用近赤外線分光法研究会, 東京, 2008年10月.
- ・Kagaya A, Ohmori F, Okuyama S, Muraoka Y and Sato K, “Blood flow and arterial vessel diameter change during graded handgrip exercise in dominant and non-dominant forearms of tennis players”, International Society on Oxygen Transport to Tissue, Sapporo, 2008.8.
- ・Ueda C, Kamo M, Saito M, Kagaya A, Osada T, Sato K, Shibuya K, Okuyama S and Sadamoto T, “Effect of tendon vibration during submaximal static elbow flexion exercise on muscle oxygenation”, 13th Annual

Congress of the European College of Sport Science, Estoril, Portugal, 2008.7.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(その他)

- ・奥山静代, “筋活動による心拍出量の変化と血流分配”, 学術フロンティア推進事業 運動時における循環調節機構の統合的解明—スポーツによる健康・体力づくりプログラムの構築に向けて—最終成果報告会(プログラム作成の基礎となる科学的エビデンス1—運動時の循環調節—) 2009年2月.
- ・奥山静代, “高齢者の左室重量と骨格筋量の関係”, 学術フロンティア推進事業 運動時における循環調節機構の統合的解明—スポーツによる健康・体力づくりプログラムの構築に向けて—最終成果報告会(プログラム作成の基礎となる科学的エビデンス2—発育、老化、疾患およびトレーニングによる循環系の変化—) 2009年2月.

研究助成等

- ・“運動時における循環調節機構の統合的解明—スポーツによる健康・体力づくりプログラムの構築に向けて—”, 文部科学省学術フロンティア推進事業(共同, 代表者: 加賀谷淳子)

西村 忍【助教(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・西村忍, “大学アメリカンフットボール選手における頸部等尺性筋力とバーナー症候群との関係について”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48: pp29-36, 2009.

(執筆)

- ・小平健太郎, 西村忍, 岡田隆, “ケガ人への対応について①”, 月刊トレーニングジャーナル No.346 (トレーニングプログラムを考える14): pp53-61, 2008.
- ・小平健太郎, 西村忍, 岡田隆, “ケガ人への対応について②”, 月刊トレーニングジャーナル No.347 (トレーニングプログラムを考える15): pp55-60, 2008.

学会発表等

- ・西村忍, “大学アメリカンフットボール選手におけるマウスピース装着有無によってみられる頸部等尺性屈曲筋力と頭頸部外傷との関係について”, 第63回日本体力医学会, 大分, 2008年9月.
- ・西村忍, 月村泰規, 阿部均, “大学アメリカンフットボール選手の脳震盪既往歴と頭部画像所見との関係について”, 第19回日本臨床スポーツ医学会学術集会, 千葉, 2008年11月.

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講師)

関東高等学校アメリカンフットボール連盟主催安全対策クリニック 講師 2008年7月.

日本アメリカンフットボール連盟主催第1回アメリカンフットボールコンベンション 講師 2009年3月.

U-19日本代表アメリカンフットボールチーム ストレングスコーチ 2009年1月-3月.

(役職)

- ・塾体育会アメリカンフットボール部 ヘッドトレーナー
- ・塾体育会サッカー部女子 コンディショニングアドバイザー
- ・塾体育会端艇部 コンディショニングアドバイザー

牛山 潤一【助教(有期)】

著書・論文・執筆・報告書

(論文)

- ・Sasagawa S, Ushiyama J, Masani K, Kouzaki M, Kanehisa H, “Faster fluctuations of the ankle extensor activities during quiet standing in humans”, Exp Brain Res (in press)
- ・Sasagawa S, Ushiyama J, Kouzaki M, Kanehisa H, “Effect of the hip motion on the body kinematics in the

sagittal plane during human quiet standing”, Neurosci Lett 450 : 27-31, 2009.

- ・奥山静代, 牛山潤一, 村松憲, 村山光義, 佐々木玲子, “若齢者における総頸動脈血管径, 内中膜複合体厚および血圧の関係”, 慶應義塾大学体育研究所紀要48 : pp1-6, 2009.
- ・You D, Murakami N, Yoshioka S, Ushiyama J, Fukashiro S, “Experiment and simulation study on movement control contribution by muscle spindle”, 2008年度東京体育学研究 pp51-53, 2008.

(執筆)

- ・牛山潤一, “伸張反射回路の運動への影響”, 月刊トレーニングジャーナル No.354 (特集 身体感覚—ボディイメージをつくるには—) : pp12-19, 2009.

(報告書)

- ・牛山潤一, “脳波筋電図コヒーレンス解析法を用いた四肢筋群運動制御機構の解明への試み”, 慶應義塾創立 150 年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム報告書 : pp3-8, 2008.

学会発表等

- ・You D, Murakami N, Yoshioka S, Ushiyama J, Fukashiro S, “Role of muscle spindle at dynamic human movement : Comparative study using experiment and simulation”, 26th International Symposium on Biomechanics in Sports, Seoul, South Korea, 2008.7.
- ・Ushiyama J, Masani K, “Postural stability is associated with muscle volume of the ankle extensors only in men”, The 55th Annual Meeting, American College of Sports Medicine, Indianapolis, USA, 2008.5.
- ・Masani K, Ushiyama J, Vette AH, Popovic MR, “Measures of postural stability are associated with gains and noise in the control system : A simulation study”, The 55th Annual Meeting, American College of Sports Medicine, Indianapolis, USA, 2008.5.
- ・Murakami N, Ushiyama J, Yoshioka S, You D, Fukashiro S, “Aftereffects of prolonged Achilles tendon vibration on maximal hopping jump performance”, The 20th Annual Congress of the Japanese Society of Biomechanics, Miyagi, Japan, 2008.8.
- ・村上直之, 牛山潤一, 吉岡伸輔, 深代千之, “アキレス腱への長時間機械的振動刺激の適用がダイナミックな動作のパフォーマンスに及ぼす影響”, 第21回日本トレーニング科学会大会, 埼玉, 2008年12月 (トレーニング科学研究賞受賞).

講演・講師派遣・フィールドワーク等の研究教育活動および役職

(講演)

- ・牛山潤一, “脳波筋電図コヒーレンス解析法を用いた四肢筋群運動制御機構の解明への試み”, 慶應義塾創立 150 年記念事業 体育研究所新棟完成記念フォーラム (シンポジウム 1 “東・京・早・慶” これからの健康・スポーツ科学を考える) 2008年 6 月.

(講師)

- ・貯筋マイスター認定講座 講師 (「基礎生理学」「基礎解剖学」「トレーニング科学」) 通年.

研究助成等

- ・“姿勢調節のメカニズムを末梢感覚神経活動から解明する”, 文部科学省科学研究費 (若手研究 (B)), 100 万円.
- ・“求心性感覚神経情報がヒトの日常動作の発現・制御に果たす機能的役割”, 笹川科学研究助成, 70万円.

当年中の研究教育活動の概要

2008年度は, 本塾に奉職してからの研究成果 (理工学部富田牛場研究室との脳波筋電図研究, 東京大学深代研究室との身体感覚研究, 本研究所における姿勢動揺研究) が次第に形になってきたことを実感できた 1 年だった. とくに本研究所の新棟完成記念フォーラムでは, 企画からシンポジストとしての発表まで, 非常に納得のいく形で成果を公表することが出来た. 投稿準備中・投稿中の論文数本を 2009 年度はしっかりと accept まで持っていき, 有期教員としての最終年度を締めくくりたい.

2. 所内定例研究会発表要旨

第1回 4月24日

加藤 大仁

スポーツの公共性とスポーツ政策について

新聞報道によれば、自民党はスポーツへの国の支援を強化するために、スポーツ振興法を抜本的に改正する方針を固めたようである。法案にはスポーツ振興を「国の責務」と明記し、スポーツ関連予算の充実を図る狙いがあるという。

そもそも、1961年に制定されたスポーツ振興法では、文部大臣（当時）にスポーツの振興に関する基本計画を定めるよう求めているが（第4条）、実際に「スポーツ振興基本計画」が定められたのは2000年になってからである。この点について文科省のスポーツ・青少年局長は、「厳しい財政事情の下では歳出予算を伴うような中長期のスポーツ振興政策を策定することは困難であった」と述べている。スポーツの振興に社会的な意義があるという意見に対してそれほど異論はないだろうが、政策の対象としてのスポーツの優先順位がそれ程高いものとして認識されてこなかったこともまた事実なのである。

ところで、スポーツを「公的に」振興する意義はどこにあるのだろうか。スポーツ振興法には、スポーツが「国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与する」（第1条第1項）という認識が示されている。また、スポーツ振興基本計画でも、「心身の両面に影響を与える文化としてのスポーツは、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成や個々人の心身の健全な発達に必要不可欠なものであり、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことは、極めて大きな意義を有している」と記されている。一方、日本野球機構（NPB）はプロ野球の憲法といえる野球協約の目的に「わが国の野球を不朽の国技にし、野球が社会の文化的公共財となるよう努める

ことによって、野球の権威および技術に対する国民の信頼を確保する」ことを挙げている。同じようにJリーグも、その理念として「豊かなスポーツ文化の振興及び国民の心身の健全な発達への寄与」を謳っている。

ここで注目したいのは、日本野球機構が野球を「文化的公共財」とするよう努めるとしている点である。確かに野球やサッカーをはじめとするスポーツが人類の文化の一つであることに異論はないだろう。ではスポーツを公共財と呼ぶことはできるのだろうか？

経済学では、「公」と「私」を区別したり、公共性を論じる際のキーワードとして「公共財」という概念を用いるが、スポーツに公共財としての側面があることは間違いない。例えばオリンピックをはじめとする国際的なスポーツ大会で日本人選手が活躍したときに多くの人々が感じる誇りや喜びにかんじて消費の非競合性が成立しているし、このような人々が選手の育成費用を提供しているわけではないという意味では排除不可能性も認められるのである。

また、スポーツには正の外部性も認められる。例えば多くの人々はスポーツを行うかどうかを決めるに当たって、国の財政問題を考えることなど殆どないだろう。しかし、多くの人々が積極的にスポーツに取り組むようになると、医療費削減のような副次的な効果をもたらすようになるのである。

しかし、スポーツに公共財としての性格を有しているとか、正の外部性をもたらすといったところで、それはあくまで定性的な分析に過ぎない。実際、スポーツに関する財・サービスの多くは準公共財として分類されるだろうし、それらが公共性をもっているかどうかは、政治的な判断に任されており、理論的な考察というよりは、むしろ決定に至る「制度」に依存する部分が大きいだろう。当然ここには効率性と公平性のトレード・オフも生じてこよう。

従って、国や地方公共団体がスポーツの振興にどの程度力を入れるべきかという問題に対する一義的な答えを求めることはできない。スポーツ施設の運営等を効率的に行うのは当然であるにしても、スポーツができるような環境の整備や、トップ・アスリートへの支援をどの程度行うのかというのは価値判断に関わる問題である。

しかし、だからといって政策を単に「好みの問題」として片付けてしまってよいということにはならない。確かに政策について論じる際には、そもそも課題の設定から政策の評価に至るまで誰もが納得するような基準などない。それでも社会のあり方や政策の合理性を絶えず検証していくことが必要とされるのである。

第2回 5月27日

村山 光義、石手 靖

新棟完成記念フォーラム・シンポジウム

「慶應義塾のスポーツ教育を考える

ー義塾150年によせてー」に関する討論会

平成20年6月15日に実施される研究所新棟完成記念フォーラムで企画しているシンポジウム2「慶應義塾のスポーツ教育を考えるー義塾150年によせてー」に先立ち、その趣旨説明およびシンポジストの石手准教授の発表内容について報告し、さらに研究所内の意見交換を行った。

まず、シンポジウムのコーディネートをしている村山から趣旨説明を行った。近年の大学における体育・スポーツ教育の動向として、「大学設置基準大綱化による保健体育科目の選択化」「教養教育の再編・創造」「大学生の健康教育の重視」「スポーツ関連学部の新設」といった状況があることを説明。一方、慶應義塾の体育・スポーツとしては、大綱化以前の必修体育実技では、第一学年の基本体育＋選択体育（30種目）において「塾生皆泳」「男女別習」などの特徴を持っていたが、大

綱化による選択化（日吉キャンパス）によって、学年枠の廃止、実施種目の検討が進み現在に至る。また、研究所では課外活動としてのスポーツ振興・塾生参加のスポーツイベントにも力を注いできた。また、慶應義塾には体育会活動（早慶戦応援）といった伝統もある。こうした中、「150年を迎えた慶應義塾」「少子高齢化・グローバル化社会の要請」「体育（身体教育）の本質」などを踏まえ「これからの体育研究所活動」について討論するのがシンポジウムの真のねらいである。

シンポジストには、文学部長の長谷山氏、教養研究センター所長の横山氏、常任理事の山崎氏も迎えるが、最初に石手准教授に「研究所のスポーツ教育・振興策」について発表してもらおう。石手氏には個人としての考えを基本に発表いただくが、これまで研究所内で議論をしてきた内容にも触れてもらおう。例えば、2007年度に将来構想委員会を中心に提示した、体育研究所の教育目標「未来を切り拓くための行動力に溢れた塾生を育てる」や、その実現のための重点的教育内容「150年体育教育プラン」である。これを踏まえ、シンポジウムでの議論のトピックスとして、「新たな塾生皆泳＝総合的な水泳教育」「社会との連携＝横浜FC、Central Sports（交流の場の利用）」「コーディネートオフィス＝企画推進・情報発信の拠点」を想定している。

以上の趣旨説明に引き続き、石手氏より当日の発表内容の草案について説明を受けた。石手氏からは、とにかく競技スポーツの志向が強いが、それ以上に一般の塾生がスポーツに触れることで恩恵をうける部分を大切に考える。体験を重視して、新たな発見を得たり、体を通じて自己表現することが体育の重要な点である、といった日頃実施している教育の中で考えている点を中心に報告がされた。

その後、全体で討議を行い、主に以下のような点の意見が出された。

「スポーツ教育と体育の用語の使い方は議論になるのではないかな」

「今は体育を嫌いな者にいかにやらせるかが課題」

「体育の効果、授業の工夫など、体育を実施する理由を示すべき」

「身体知に関して、学びとして言語化することと一体であるべき」

「非常勤講師も含めて義塾の教育を考えていくべき」

議論は約1時間に及んだが、所員からの意見も踏まえ、当日のシンポジウムまでさらに準備を進めていくこととして討議を終えた。

第3回 6月24日

村山 光義

個人の筋厚を考慮した新たな筋硬度評価方法の提案 (第13回ヨーロッパスポーツ科学会議発表予行として)

非侵襲的に行う筋硬度評価は、上層の皮下組織と下層の筋組織双方の影響を受けるとともに、個人による組織量の違いにも影響を受ける。また触診を模倣した押圧法では押し込む量によっても変形する対象組織異なり、その評価は複雑となる。例えば、同じ皮下組織の厚さを持った対象でも、筋組織が薄い場合、骨までの距離が短い場合同じ押し込み量であれば、筋組織の薄い者の方が相対的に「硬い」データが出る。

我々はこの筋硬度評価について、これまで上層の皮下組織と下層の筋組織を2層の弾性モデルとして、皮下組織厚を除いた筋組織を直線回帰する Horikawa ら (1993) の方法をとってきた。この方法は、皮下組織と筋組織を分離して計算する利点を持つ。しかし、先に示したように、個人の筋組織量を考慮した規格化を検討する必要がある。そこで、今回、一定の筋組織を変形させるために必要な押し込み量を検討し、直線回帰する範囲を規格化することを試みた。

対象は大学生157名 (男85, 女72) で、上腕二頭筋を対象とした。上腕骨の60%部位の超音波画像から皮下組織厚 (ST) と筋厚 (MT) を決定し、押し込み変位量約 25mm、押し込み速度 40mm/s で筋硬度を計測した。個人の 30%MT までの範囲を 5% 毎に直線回帰し筋硬度 E を計算した。その結果、ST, MT, 最大押し込み深度は男女で有意差があったが、E 5% ~ E30% のそれぞれの平均値には男女差がなかった。従って、個人の筋厚を規格化することで、男女の筋硬度は同一に扱えることが示された。さらに、E10%, E15% のみで ST, MT との相関が認められず、組織量の影響を受けにくいことが示された。E 5% ~ E30% はそれぞれに高い相関が示され、E15% が中間的性質を示すことから、筋厚の 15% までの範囲から筋硬度を計算することが適切と結論付けた。また、E15% とした上腕二頭筋の筋硬度の標準値は、 25.1 ± 4.1 kPa. であった。今後、大腿部や下腿部の筋硬度についても規格化を検討したいと考える。

(参考文献・その他)

Abe et al. (1994) Am J Hum Biol 6, 161-170

Horikawa et al. (1993) Med Biol Eng Comput 31, 623-27

Murayama et al. (2000) Eur J Appl Physiol 82, 361-67

第4回 7月22日

村松 憲

携帯型デジタルハイスピードカメラの活用案

平成 19 年度日吉キャンパス調整費により、ディテクト社の携帯型デジタルハイスピードカメラを購入することができたので、実演を含めながら、その活用案について発表した。

1) 家庭用デジタルビデオカメラとの比較

- ・家庭用は 1 秒間に 30 コマであるが、本機は高画質でも 200 コマ、画質を落とせば最大 2000 コマ撮影できる。

- ・ハードディスクにデータを保存するため、大量のデータが保存できる

2) 従来型（アナログタイプ）との比較

- ・小型、軽量であるため持ち運びが容易、バッテリー駆動も可能であるためスポーツ現場での撮影が容易
- ・毎秒 200 コマまでは高画質で、従来型のアナログタイプに比べると画質が圧倒的に勝る。毎秒 600 コマ程度でも、従来型に比べると高画質である（画質については当日実演した）。
- ・データが AVI ファイルとしてハードディスクに直接保存されるため、データのやりとり、動作解析ソフトとの互換性に優れる。

3) 活用実績

- ・2007 年 JAPAN OPEN TENNIS において、世界ランキング10位以内の選手を中心に撮影、ナショナルチームにフィードバック
- ・2007年慶應チャレンジャー（蝮谷における男子の国際テニス大会）において、体育会庭球部選手を中心に撮影、庭球部にフィードバック
- ・2007年全日本選手権において、上位進出選手を中心に撮影、ナショナルチームにフィードバック

4) 今後の予定

- ・体育実技において、撮影、フィードバックを行う
- ・体育学演習等の授業において、撮影、フィードバックを行う
- ・体育会庭球部・卓球部に対して撮影、フィードバックを行う
- ・その他塾内のスポーツ活動（体育会・その他）に対して、需要を見つけて撮影、フィードバックを行う
- ・JAPAN OPEN TENNIS 等において、世界

トップクラスの選手を中心に撮影、最新の技術をナショナルチーム・テニス協会にフィードバック

第 5 回 10月28日

村松 憲

ダートフィッシュ・ソフトウェアの「タギング」機能活用例・・・庭球部支援を例に

平成 20 年度日吉キャンパス調整費により、ダートフィッシュ・ソフトウェアを購入して頂くことができた。このソフトウェアは、複数の動画ファイルを同時に再生して比較したり、重ね合わせて比較するなどの動作分析ができるほか、「タギング」機能、すなわち、動作ファイルに付箋をつけて、あとから特定のシーンを検索する、という機能を備えている。

平成20年 9 月から10月にかけて、体育会庭球部に対して、このタギング機能を用いた戦術面の支援を行った。手順としては、

- ・戦術面の分析について、庭球部と打ち合わせ
- ・ダートフィッシュ・ソフトウェアの説明
- ・タギング機能の「ボタン」作り（動画をコンピュータに取込ながらボタンを押すことで、様々な場面を特定する付箋を付けることが出来る）
- ・対象となる試合のビデオ撮影。主として、1 部の他大学（早稲田、法政、亜細亜、日大、中央）の選手の試合を撮影。
- ・撮影したビデオ映像のパソコンへのインポート
- ・ビデオ映像を見ながら、「ボタン」を押していき、付箋をつける（タギング）作業の実施
- ・タギング終了後、特定のシーンを検索し、まとめて動画ファイルとして出力
- ・それと同時に、各種確率など、定量的な分析も行う

- ・まとめた動画ファイル、定量的なデータから、コメントを作成して選手にフィードバック

という流れで行った。研究会では、実際にテニスの試合の映像を見ながらボタンを押す、というタギング作業を行い、条件に合ったシーンを検索する、という実演を行うとともに、授業等への活用を呼びかけた。戦術分析だけでなく、例えば、学生 A, B, C, D, E の 5 名が混在して移っている映像の中から、5 つのボタンを作成することで、それぞれの学生が移っているシーンを集める、という活用方法なども紹介した。また、前回発表会で行った動作分析について、再度、ハイスピードとの組み合わせ例として紹介し、授業等での活用を呼びかけた。

第 6 回 12 月 2 日

研究委員会企画

理工学部 森田 寿郎先生 ご講演

昨年度に引き続き、研究委員会による企画として、理工学部機械工学科の森田寿郎先生にご講演頂いた。理工学部での学部生への教育、卒論や修論の研究指導、地域の小学生への科学教育活動など、多岐にわたってご活躍されているなかで、教育・研究活動をどのように両立されているか、ご自身の「生き甲斐」といった心理的側面も踏まえてお話頂いた。また、実際に森田研究室で展開されている、「人間や自然と共生する機械」の設計と制御に関する研究についてその概念から具体的な内容までご紹介いただいた。なかでも、小さい子供をもつ親にとってより使い勝手のいいベビーカーに関する研究、伝統芸能のひとつである能に関する研究などは、本研究所の人間の運動制御研究と密接な関わりあいをもつものであり、本研究所の所員にとっても大変有意義なものであった。

第 7 回 1 月 27 日

佐々木玲子

ボールルームダンスの運動特性

ボールルームダンスは、男女二人で組み様々なステップを踏みながら移動するという、他のスポーツ等とは異なる形式をもった運動である。また、その特性によるところもあり、これまでにその運動特性に関する分析はほとんど行われていない。本報告は、ボールルームダンスに関して、自然科学的方法を用いたいくつかの観点から、その特性を明らかにしようと試みた実験の結果である。

実験では、フォースプレートを用いた床反力計測、筋電図を用いた下肢の筋活動様相から、数種の基本的ステップの動作特性を、また、運動中の心拍数変動から、競技時を模擬した運動実施時の運動強度を推定した。対象は、ダンスの競技会において過去に国内優勝経験および国際大会出場経験のある日本のトップレベルの実績を持つペアの男女であった。以下に結果の概要を示す。

ステップの特性：対象としたダンスステップ（スローフォックストロットーフェザーステップ、スローフォックストロットーリバーターン、タンゴウォーク）における床反力曲線は普通歩行とは異なり、垂直方向分力の時間経過に伴う二峰性のパターンはみられず、ステップ中にほぼ一定の値が維持される（台形様の）波形が得られた。対照とした技術レベルの低い被検者（愛好者）での同様の動作では、二峰性の波形が観察されたことから、上級者においては重心の上下動が小さくなるようスムーズに全身の移動が行われているものと考えられる。ステップ時の筋活動様相（支持脚の大腿直筋、大腿二頭筋、前脛骨筋、腓腹筋）も同様に普通歩行とは異なり、全般に運動中の筋の活動水準が高く、また拮抗筋の同時活動もみられ、上記の移動様式を支えていることが示された。運動強度特性：運動の速さが異なる 2 つの種目（クイックス

テップ、スローフォックストロット)の競技場面を模擬した運動中の心拍数は、その変動パターンでは両者とも運動開始後約1分まで直線的に上昇し、以後定常状態を維持した。2つの種目を比べると、速いステップのものでは運動開始後の心拍数の上昇がより急激で、また180拍/分以上が定常的に継続し、高強度の運動であることが確かめられた。運動中は二人で組んだままの状態であるため上肢は固定され、脚を常にやや屈曲した状態で、一定の運動速度を維持しながら行う運動形態の身体負荷がかなり大きなものであることが推測できた。

野口 和行

障害者を対象とした自然体験活動の実践

自然体験活動は、自然の中で様々な活動を通して心身のリフレッシュや楽しみ、教育的効果を目指すものであり、全ての人に対して開かれている。最近では日吉キャンパスでも研究プロジェクトの一環として障害学生に対する支援のあり方が検討されている。そこで今回は障害を持った人たちを対象とした実践と研究の現状を紹介した。

【障害者を対象とした実践1

ー成人を対象とした実践ー】

名 称：Camp in the Forest
時 期：8月中旬の2泊3日
場 所：山梨県 瑞垣山麓のロッジ（宿泊泊、希望者のみテント泊）
参 加 者：20名程度（身体障害、知的障害、自閉症）
補助学生：参加者1名につき1名
スタッフ：40名

このキャンプは、山梨県の障害者授産施設の利用者を中心とした参加者を対象に、2泊3日で行っており、今回で11年目を迎える。野外炊事、キャンプファイアー、川遊び、登山、全員参加のコンサート、クラフトなどが

主なプログラムである。キャンパー1名に対して1名のボランティア学生がサポートにあたり、障害者3名、ボランティア3名で構成されるグループには、障害者介助に関する豊富な経験を持つスタッフを配置した。参加者をサポートするスタッフとは別に、プログラムの指導を行うスタッフ、食事作り等をおこなうマネジメントスタッフを配置した。

3日間を通して天候に恵まれ、特にコンサートでは、人とのコミュニケーションに障害を持つキャンパーもみんなの前に立つなど、大きな成果があったように感じられた。

【障害者を対象とした実践2

ー発達障害児を対象としたデイプログラムー】

名 称：くろねえキャンプ
時 期：9月下旬の1日
場 所：横浜市 こども自然公園
参 加 者：8名
スタッフ：20名

このキャンプは、横浜市の発達障害児を持つ家族のグループから依頼を受けて行っているキャンプで、今回で2回目の実施となる。横浜市の公園でのデイプログラムで、野外炊事、自然を探索する活動、自然のものを使って物を作る活動等を実施した。昨年の反省を活かしてプログラムの内容やスタッフの配置を変え、スムーズな運営ができたように思われる。

【障害者の自然体験活動に関する研究】

障害者を対象とした自然体活動の実践については、以下がその効果として挙げられる。

1) 参加者に対する効果

- ・レクリエーション
- ・治療、リハビリの効果
- ・社会性を育む
- ・障壁を乗り越える

2) 周囲に対する効果

- ・ノーマライゼーションの実践

- ・ 青少年の育成
- ・ レスパイトケア

障害者の自然体験活動に関する研究としては、保護者を対象とした研究（川端、1997）、ボランティアを対象とした研究（綿ら、1991）、事例研究（小山ら、1994 佐藤、2002）などがあるが、参加者を対象とした実証的な研究はまだ行われていないのが現状である。

【今後の課題】

2009年3月より、アメリカ・ノースカロライナ州立大学で Outdoor-adventure Education に関する研究と実践する機会を頂くことになった。ノースカロライナ州は、障害者を対象とした療育プログラム（TEECH）発祥の地であり、障害者を対象としたさまざまなプログラムがあり。障害者を対象とした自然体験活動も数多く実践されている。

留学先では、大学生を対象とした自然体験活動の実践・研究にあたると共に、障害者を対象とした実践並びに研究等の資料収集を行っていきたい。

3. 浅野基金研究補助による研究成果報告

研究課題：スポーツ権をめぐる法的、政治経済学的考察

研究責任者：加藤大仁

ここ数年、スポーツ振興法の改正に向けた政治的な動きが新聞報道の中にも散見されるようになった。先日も教育再生懇談会にてスポーツ庁新設構想が打ち出され、麻生首相や河村官房長官も前向きに検討する姿勢を示しているとの報道があった（日本経済新聞2009年4月18日）。

昨年度の研究会でも報告したように、自民党はスポーツへの国の支援を強化するために、スポーツ振興法を抜本的に改正する方針を固めつつあるようである。スポーツ界からも、北京オリンピックで日本選手団団長を務めた JOC の福田富昭選手強化本部長が、帰国直後に行った会見で、4年後のオリンピックに向けて「スポーツ省」を設立する必要性を強調するとともに、国策として国際競技力の向上に取り組むことの必要性を強く訴えたことに如実に表されているように、スポーツ関連予算の充実が望まれている。もし、スポーツ振興法の改正が実現し、更には現在選手の育成や生涯スポーツ、学校開放など複数の省庁にまたがっているスポーツ関連の政策を一手に引き受けるような省庁が新設されるとなると、我が国のスポーツ政策にとって、大きな転換点となろう。

そこで、本発表では、我が国の法体系や、国際憲章、国際体育スポーツ年（2005年）の文書などを紹介し、スポーツの意義や、スポーツの権利性をどのように考えればよいのかについて考察を行なった。

4. 大学体育指導者中央研修会報告

報告者：村山光義

期 日：平成20年8月19日～21日

場 所：富山県富山市立山国際ホテルほか

参加者：29名

今年度の研修会は大学体育連合北陸支部の主管で実施され、富山県の立山連峰を拠点に「山歩きを利用した教育プログラム」を題材に研修会が行われた。3日間の研修内容は以下の通りである。

1. 研修プログラム

【第1日目】

講演Ⅰ 「学習指導要領の改訂について」

講 師 白旗和也（文部科学省スポーツ・青少年局企画体育課 教科調査官）

講演Ⅱ 「立山信仰の歴史と立山曼陀羅」

講 師 福江 充（富山県立山博物館主任・学芸員）

講演Ⅲ 「立山の自然と歴史」

講 師 渋谷 茂（立山自然保護センター所長代理・富山県ナチュラリスト）

情報交換会

【第2日目】

4コースに分かれた登山（山歩き）実技研修

1) 弥陀ヶ原 — 室堂平 コース

2) 室堂平 — 一の谷 — 弥陀ヶ原
コース

3) 弥陀ヶ原 — 一の谷 — 室堂平
コース

4) 立山（雄山）登山コース

各コース別の分科会

【第3日目】

3コースに分かれた研修

1) 美女平コース

2) 山岳文化コース

3) 称名滝コース

2. 研修内容

1) 講演Ⅰ 「学習指導要領の改訂について」

講 師 白旗和也（文部科学省スポーツ・青少年局企画体育課 教科調査官）

学習指導要領が改訂され、体育科・保健体育科の改善の要点について説明があった。

時間数の増加

小学校1年＝102時間、2～4年＝105時間、

中学校＝105時間

領域の変更

小学校：各学年に体づくり・器械・陸上・水泳・球技・ダンスの内容を明示

中学校：武道・ダンスの選択をやめ、必修とする

体育分野の要点

- ・指導内容の体系化：「体の基本的な動きを身につける」「多くの領域の運動を体験」「運動やスポーツを継続する」という3つの時期を考慮。発達段階のまとまりとして、小学校1～4年、小学校5年～中学2年、中学校3年～高校3年の4年毎のまとまりで考える

- ・指導内容の明確化

- ・体づくり運動の充実

- ・指導内容（運動の取り上げ方）の弾力化

- ・知識に関する領域の改善

※運動する子とそうでない子の二極化が進み、子供の体力低下も問題となっている。生涯にわたって運動に親しむ姿勢や能力の育成が十分に図られていない例も見られる。また、学習体験のないまま中学・高校で領域を選択しているのではない

か、という疑問もある。そのため、小学校から各領域を体系的に指導し、中学校ではダンス、武道を男女必修にして、生涯の運動実践に結びつけていくという意図がある。

2) 講演Ⅱ 「立山信仰の歴史と立山曼陀羅」

講 師 福江 充(富山県立山博物館主任・学芸員)

立山連峰は日本屈指の登山エリアで、幅広い年代層の多くの人々が訪れている。その起源は立山山中地獄に対する信仰であり、立山の自然・地形はまさに地獄に見立てられるものである。この信仰と登山の歴史について立山曼荼羅を用いて解説を受けた。

立山雄山頂上の峰本社には阿弥陀如来と不動明王が祭られ、9世紀以降開山されたようである。地獄谷や剣岳などの景観が地獄に見立てられ、また女人禁制の霊場とされていたため、江戸時代には、男性は立山を「あの世」として禅定登山することで擬似的に死者となり、女性には山麓の村において「布橋大灌頂」の儀礼によって浄土往生を約束された。この布教において、持ち運びに便利な掛け軸である立山曼荼羅の絵解きによって積極的に勧誘がされた。立山曼荼羅は立山の地形を模擬し、いくつもの地獄での苦行が描かれている。人々は曼荼羅に描かれた、現世の罪によって定められる死後の世界をみて、立山登山・立山信仰によってその不安から解放されることを願ったようである。

現在、立山は探検や登山・スキーなどのスポーツの山、観光の山として注目されているが、そこにはこうした信仰の歴史が重ねられており、現在もその影響が残る特別な山といえよう。

3) 講演Ⅲ 「立山の自然と歴史」

講 師 渋谷 茂(立山自然保護センター所長代理・富山県ナチュラリスト)

立山の豊かな自然とその歴史を映像によって解説する講演を受けた。多くの高山植物・花や特徴的な風景を見て、翌日の登山・山歩きへの期待を大きくした。

4) 登山(山歩き)実技研修(2日目)

立山(雄山)登山 コース

講 師 木戸繁良、道正政信

室堂平(標高:2450m)を出発地点とし、一の越(標高:2700m)を経由して、頂上(雄山:標高:3003m)を目指すコース。日本最古の山小屋、立山室堂の見学(国指定重要文化財)をしてから登り始めた。一の越までは石畳が敷かれた歩きやすい道で約1時間、残雪が間近に見られた。一の越から山頂までは急な岩場で霧がたちこめていたが、これも1時間弱で登頂できた。あいにく眺望はのぞめなかったが、山頂の神社で祈祷を受けることができ、帰り道では雄山の霧がはれてその全容を見ることができた。さらに、予定外に地獄谷をめぐり、硫黄臭立ち込める鉱泉の噴出す大地を目の当たりにできた。

単に山に登るというプログラムに立山信仰や残雪残る自然環境への興味や知識の高まりが加わって、その実体験が一層価値あるものとなると感じた。

5) 登山(山歩き)実技研修(3日目)

称名滝コース

講 師 道正政信、谷村正則

3日目の山歩きコースはあいにくの雨模様であったが雨のプログラムも是非体験してほしいという主催者側の意向もあり、予定通り実施された。その中で、我々の称名滝コースはバスで30分程度移動し、山間の駐車場に到着してから歩き始めとなった。到着とともにそれまで小振りだった雨足が速くなり、みな雨具を着ての出発になった。受講メンバーは13名であり、道正講師、谷村講師の2班に分かれ、やや時間差をもってそれぞれ山道を歩

きはじめた。

称名滝は、350m という日本一の落差を誇る四段構成の滝であり、国指定の名勝および天然記念物として、日本の滝百選に選定されているそうである。滝までは駐車場から15分ほどの距離で、ややゆるやかな坂道であったが、行程の途中から滝が見えてきた。道正講師から少し遅れて歩いていた私と数名のメンバーからは、立派な滝に感嘆の声があがっていた。しかし、私には、これが本当の称名滝であるのか、凝わしいという思いがよぎっていた。実は、この滝は前日に室堂平に向うバスの中から遠く眺めることができた。行き、帰りとも、しばしの停車によってヘアピンカーブの道路からその姿が谷あいの向かい側に見えたのである。この記憶によれば、滝は、崖の位置関係から考えて、もっと左手に見えるはずなのだ。この点をメンバー内で議論して盛り上がっていたが、ほどなく、先を行く道正講師らから伝達があった。案の定、本物の滝は完全に近づいてからでないと思られないそうだ。それにしても、本物でない正面の滝もずいぶん立派なものだ。この滝はハンノキ滝と呼ばれ、実はその落差は497m（一般には500mとされる）で、350mの称名滝よりも落差が大きいのだそうだ。このため、事実上は日本一の落差の滝なのだが、いつも存在している滝ではないので、日本一の落差の滝として認められないことも多いということが後でわかった。幸いに、雨の影響で水量がとても増えており、ハンノキ滝の右側にソーマン滝と呼ばれるもう1つの滝までも現れて、3つの滝が並んだ珍しい光景を見ることができたのである。

滝から流れ出る川もその水量は明らかに多く、その流れの勢いは恐怖感を覚えるほどであった。川の流れの激しさで、互いの会話も聞き取りづらかった。称名滝の存在がわかるまで、我々は道の左側を歩いてきたが、前方に立ちはだかる岩の壁のちょうど奥が称名滝であり、ルートは右に川を渡る橋に続いていた。滝壺が現れ、この橋のエリアに近づくにつれ、まるで雨なのか滝の水しぶきなのか、わからないほどのシャワーの中を歩くようになっていた。しかし全員雨具なので大丈夫。マイナスイオンにあふれた自然のもてなしに抱かれて進んでいった。橋を渡って階段で少し高い見晴らし台に出るとちょうど称名滝が正面にみえた。ここにある「称名滝」の看板の前で、皆で記念撮影をした。くりかえし、道正講師から、「こんなに水量の多い滝を見られることは、なかなかない。まして、3つの滝を見られることは地元の人でもあまり体験しない」と解説された。一同、「雨の中歩いた甲斐があった」と満足の様子。やはり、自然は姿を変えるもので、実体験してみなければ始まらない。ただ単に滝を見ようという単純なものではなく、そこには自然のドラマが待ち構えている。我々が自然の中に生きていることをあらためて感じ取れる研修となった。

（このコースの報告内容は機関紙大学体育に掲載の予定）

6) その他

平成21年度の大学体育連合中央研修会は、中国支部の主催で、山口県で開催される予定。

5. Hiyoshi Research Portfolio 2008

2008年11月、本塾日吉キャンパス来往舎にて執り行われた「Hiyoshi Research Portfolio 2008」に体育研究所より、以下の研究成果を報告した。

1. プロジェクト研究

・石手 靖

「産学協同スポーツプロジェクトマネジメント『日吉キャンパスの可能性』に関わる研究発表」

本研究は、スポーツ活動を通じて地域社会・大学生に対してできることを考え、その推進力となる仕組みや組織の構築を目的に執り行われた。発表では、地域スポーツクラブの横浜FCと共催した「YOKOHAMA FC・KEIO サッカースクール」の開催、またその他の活動について報告した。

・加藤幸司

「慶應義塾の体育における一貫教育についての研究」

中央教育審議会の中間報告では、『子どもたちにとって必要なもの』を『すべての子どもたちが身に付けられるようにすること』とされている。本塾の一貫教育制度は、その目的達成へ大きな役割を担っていると考えられる。しかしながら、塾の体育授業カリキュラムが有機的一貫性をもって実施されているかどうかは明らかでない。本研究では、今後の塾体育教育の一貫性を考えるために、一貫教育校間の体育における連携と交流の現状をまとめた。

・加藤大仁、近藤明彦、山内 賢、野口和行
「スポーツ・体育に関する人文科学的研究」

1. 大学生のスポーツ・運動行動とその意識に関する調査
2. 学校教育現場での BLS 教育普及活動への提言 —慶應義塾における BLS 教育

の事例

3. 共政策としてのスポーツ政策に関する一研究

人文社会研究班では、「大学体育」をよりよいものにしていくにはどうしたらいいのかという問題意識の下にプロジェクト研究を行ってきた。報告1は慶應義塾大学の全学生を対象に「大学生のスポーツ・運動行動とその意識」に関する調査結果をまとめた。報告2では、日本における BLS 教育の普及・啓発状況並びに本塾における実施状況を俯瞰し、今後の活動についての提言を行なった。報告3では、公共政策としてスポーツを展開していく意義を政治経済学的な観点から考察したうえで、政策の合理性を検証する作業の必要性を指摘した。

・佐々木玲子

「塾生の身体能力向上に向けた形態測定および評価基準について」

塾生が体育・スポーツ活動を通じて、心身ともに健康な状態を維持・促進するために、その現状を把握し、それをもとにどのような働きかけをしていくことが望ましいかを考えていく基礎資料を得るため、これまでに形態を中心とした測定を実施してきた。本企画では、昨年までの体育研究所プロジェクト研究で得られたデータをもとに塾生の身体特性と、体肢の筋組織厚と皮下脂肪厚を中心とした形態の評価ノルムを提示した。

・村山光義

「スポーツ技術向上のための指導プログラムの開発」

我々は、体育研究所プロジェクト研究において、スポーツ技術向上のための指導プログラム開発を進めており、「映像フィードバックを利用した技術指導 -Dart Fish の活用-」「剣道における素振り速度の評価システムの開発」の2テーマについて、これまでの成果

を報告した。特に、竹刀素振り速度評価では、加速度センサー内蔵竹刀による評価システムを、理工学部物理情報工学科内山研究室との共同研究によって開発した。

2. 個人研究

・村山光義

「個人の組織量を考慮した筋硬度評価方法の提案」

これまで筋硬度評価において皮下組織と筋組織の押込反力を2層成分に分離し筋硬度を計算してきた。しかし、押込量が一定の場合、筋量の少ない者ほど過大評価される可能性がある。本研究は個人の筋厚を考慮し、同じ変形比率における押込反力で筋硬度評価を行う方法を提案する。その結果、上腕二頭筋においては、筋厚の15%までの成分から硬度計算することが適当と考えられ、筋硬度の標準値は 25.1 ± 4.1 kPa となった。

・牛山潤一

「大学生のバランス能力に関する研究～とくに足圧中心動揺と下腿筋量との関連性に注目して～」

本研究は、男女大学生約150名を対象に、静的立位時における足圧中心(COP)動揺と、超音波Bモード法より計測した足関節底屈筋群の体積との関連性から、筋量が若年者の平衡機能の個人差に与える影響を検討した。結果、とりわけ男子において、揺れの大きさを評価するCOP動揺指標と筋量との間に有意な負の相関が観察された。本企画ではこれ

らのデータを紹介し、筋量が若齢者のバランス能力の一因である可能性を検証した。

・奥山静代

「多段階静的足底屈運動時の中心および末梢循環の関係」

目的は多段階静的足底屈運動時の心拍出量と膝窩動脈血流量関係を明らかにすることにより、負荷増加に伴う活動筋の血流需要増加に心拍出量がどのように対応するかを明らかにすることであった。筋への血流量と心拍出量は負荷増加に対して、必ずしも一致した変化を示さず、低強度では心拍出量の増加なしに活動肢への血流増加が起こり、強度が高くなると両パラメータが増加する。その結果、心拍出量に占める活動体肢への血流の割合が変化することが明らかになった。

・西村 忍

「大学アメリカンフットボール選手における頸部筋力と頸部外傷（バーナー症候群）に関する研究」

アメフト競技中に発生するスポーツ傷害の中で、重大事故につながるのは頭頸部外傷である。その予防対策として、頭頸部のメディカルチェック、正しい当たり方の技術の習得、頸部筋力の強化などが挙げられている。本研究では、頭頸部外傷の中で、特にバーナー症候群に注目し、①大学アメフト選手が競技中に受傷したバーナー症候群に関する既往歴調査と②頸部等尺性筋力測定を行い、その関係について発表した。

Ⅲ. 教育活動記録

Ⅲ－１．授業の実施

１．平成20年度体育科目の履修者統計

１）体育学講義と体育学演習

平成20年度は、体育学講義 7 コマ（前年比 -1 コマ）、体育学演習 6 コマ（前年比 +1 コマ）を開講した。体育学講義のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-1に、体育学演習のタイトル及び履修者数を表Ⅲ-1-2に示す。履修者数の合計は体育学講義で160名（前年比 -19%）、体

育学演習で59名（前年比 +5%）であった。演習は 1 コマ増でわずかに前年を上回る履修者となったが、講義は18年度、19年度に引き続き減少となった。講義は 1 コマ減少しているが、大幅な減少と捉えられる。依然、授業内容の啓蒙や告知について検討を進める必要があると考えられる。

表Ⅲ-1-1. 平成20年度 体育学講義のタイトル及び担当者

講 義 名	コマ数			担 当 教 員	履修者数
	春	秋	計		
スポーツの効用を科学的にみる（スポーツ総論）	1		1	村山光義・佐々木玲子・吉田泰将・近藤明彦	10
スポーツ心理学の世界	1		1	近藤明彦	32
スポーツと身体（からだ）の基礎理論	1		1	吉田泰将	63
アウトドアを考える		1	1	村山光義・野口和行	3
アスリートのためのスポーツ科学		1	1	近藤明彦・村松 憲・加藤幸司	14
健康と運動の科学		1	1	近藤明彦・齊藤郁夫・辻岡三南子・和井内由充子・森 正明	13
現代社会とスポーツ		1	1	加藤大仁	25

表Ⅲ-1-2. 平成20年度 体育学演習のタイトル及び担当者

講 義 名	コマ数			担 当 教 員	履修者数
	春	秋	計		
自然体験活動演習（体験から学ぶ）	1		1	野口和行	4
アスレチックトレーニング演習	1		1	山内 賢・西村 忍	9
からだの動きをはかる（バイオメカニクス）	1		1	佐々木玲子・村山光義	2
BLS（ベーシックライフサポート）～救急法の基礎～		1	1	山内 賢・西村 忍	18
スポーツメンタルトレーニング		1	1	近藤明彦	18
テニスを更に楽しもう		1	1	村松 憲	8

２）体育実技 A・B

表Ⅲ-1-3 に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の担当者とそれぞれの担当種目、表Ⅲ-1-4 に体育実技 A・B（ウィークリースポーツ）の各種目の履修者数を示す。表Ⅲ-1-4に示すように、日吉・三田合計で7071名の申し込み（前年比 +4%）に対し、最終的に

6426名の履修者（前年比 +2%）となった。平成20年度は新学部の薬学部が体育実技を必修科目として 2 単位設置し、延べ400名分（200名×2）の履修者増が見込まれた。しかしながら、結果的には微増にとどまり、薬学部の加入がなければ引き続き減少となる数字であった。この理由を考えると、履修申込数が

表Ⅲ-1-3. 平成20年度 体育実技 A・B（ウィークリースポーツクラス）担当者及び担当種目

	担当者	種 目
教 授	近 藤 明 彦	ウォーキングエクササイズ、体力 UP コース
〃	安 藤 勝 英	柔道
〃	佐々木 玲 子	エアロビクス
〃	植 田 史 生	剣道
〃	綿 田 博 人	野球、ゴルフ
准 教 授	篠原しげ子	ダンス
〃	松 田 雅 之	陸上競技、ジョギング、卓球
〃	石 手 靖	バレーボール (B)
〃	村 山 光 義	バレーボール (A、B)、フライングディスク、ニュースポーツ (B)
〃	山 内 賢	ハンドボール、バスケットボール、体力 UP コース
〃	吉 田 泰 将	剣道
〃	加 藤 大 仁	バスケットボール
専 任 講 師	野 口 和 行	ニュースポーツ、バレーボール、フライングディスク (B)
〃	須 田 芳 正	
〃	村 松 憲	テニス
専任講師(有期)	加 藤 幸 司	バドミントン
〃	奥 山 静 代	エアロビクス
助 教(有期)	西 村 忍	体力 UP コース
〃	牛 山 潤 一	体力 UP コース
兼 担 講 師	板 垣 悦 子	ボディメイクエクササイズ
非 常 勤 講 師	李 宇 諤	サッカー
〃	岩 崎 陸	サッカー
〃	大 嶽 真 人	フットサル
〃	小 笠 原 清 忠	弓術
〃	勝 又 正 浩	ゴルフ
〃	加 藤 大 雄	テニス
〃	川 西 大 介	アーチェリー
〃	菊 地 啓 太	野球
〃	菊 池 秀 悦	トランポリン
〃	木 塚 孝 幸	バスケットボール
〃	木 村 和 宏	バスケットボール
〃	小 松 恭 三	軟式野球
〃	坂 井 利 彰	テニス
〃	島 田 桂 太 郎	ボクシング
〃	竹村りょうこ	テニス
〃	田 中 由 美 子	フェンシング
〃	手 嶋 智 佳 子	テニス
〃	野々村 芳 和	サッカー
〃	濱 名 邦 雄	ソフトテニス
〃	平 井 克 英	バドミントン
〃	藤 平 信 一	合気道
〃	堀 場 雅 彦	テニス
〃	松 本 健 太 郎	テニス
〃	松 山 保 幸	自動車
〃	山 田 美 絵 子	バレーボール
〃	吉 田 武	卓球

表Ⅲ-1-4. 平成20年度 体育実技A・B（ウィークリースポーツクラス）種目別履修状況

地区	科 目 名	コマ数			定 員	登録数	倍率	最 終 履修者数	充足率
		春学期	秋学期	計					
日 吉 地 区 開 設	アーチェリー	2	2	4	80	147	1.84	81	101%
	ウォーキングエクササイズ	3	3	6	180	77	0.43	103	57%
	エアロビクス	8	8	16	320	335	1.05	315	98%
	ゴルフ	6	6	12	240	375	1.56	240	100%
	サッカー	10	10	20	800	371	0.46	492	62%
	ジョギング	2	1	3	90	44	0.49	64	71%
	ソフトテニス	1	1	2	40	8	0.20	11	28%
	ダンス	2	2	4	80	77	0.96	74	93%
	テニス	16	16	32	740	913	1.23	700	95%
	トランポリン	2	2	4	80	132	1.65	80	100%
	ニュースポーツ（A・B）	0	2	2	60	24	0.40	33	55%
	バスケットボール	15	15	30	688	775	1.13	730	106%
	バドミントン	8	8	16	480	827	1.72	535	111%
	バレーボール（A）	6	6	12	480	291	0.61	381	79%
	バレーボール（B）	6	6	12	440	256	0.58	297	68%
	ハンドボール	2	2	4	160	111	0.69	153	96%
	フェンシング	1	1	2	40	16	0.40	20	50%
	フットサル	3	3	6	150	319	2.13	150	100%
	フライングディスク（A・B）	0	2	2	60	49	0.82	60	100%
	ボクシング	2	2	4	120	94	0.78	113	94%
	剣道	6	8	14	280	69	0.25	100	36%
	合気道	1	1	2	60	66	1.10	60	100%
	自動車	2	2	4	80	129	1.61	80	100%
	柔道	3	3	6	180	55	0.31	70	39%
	体力 UP コース	9	9	18	385	342	0.89	395	103%
	卓球	6	6	12	360	372	1.03	359	100%
	野球	4	4	8	240	119	0.50	151	63%
	軟式野球	1	1	2	60	113	1.88	61	102%
	陸上競技	0	1	1	30	7	0.23	8	27%
	ボディメイクエクササイズ	1	1	2	40	43	1.08	40	100%
	日 吉 合 計	128	134	262	7043	6556	0.93	5956	85%
三 田 地 区 開 設	ダンス	2	2	4	80	98	1.23	89	111%
	テニス	5	5	10	132	150	1.14	121	92%
	バレーボール	2	2	4	100	55	0.55	57	57%
	弓術	2	2	4	80	70	0.88	70	88%
	剣道	2	2	4	80	42	0.53	42	53%
	合気道	1	1	2	60	69	1.15	60	100%
	柔道	2	2	4	120	31	0.26	31	26%
	三 田 合 計	16	16	32	652	515	0.79	470	72%
全 体 合 計		144	150	294	7695	7071	0.92	6426	84%

最終履修者数に反映する1要因であるため、コマ数と定員数に課題が見出せる。平成20年度は19年度に引き続いて150年記念事業に伴い、春学期に陸上競技場が利用できない等の諸事情でコマ数減少と定員数減少（530名余り）があった。これは、19年度の定員数減少（560名余り）に引き続き、大幅な規模縮小といえる。今後も日吉記念館の建替え工事など施設の制約が伴う状況は続いていく。逆に、数年後再びコマ数の規模を回復することで、一定の履修者増加も期待される。従って、当面、単純に履修者実数だけを問題にせず、定

員の充足率を高めることに努力したい。平成20年度は全体として84%の充足率であった。これは前年比で+7%と向上を示した。

表Ⅲ-1-5に体育実技A・B（シーズンスポーツ）の各種目の担当者及び履修者数を示す。履修者数は380名で、前年比-4%で、充足率も81%（前年比-3%）とやや減少した。しかし、登録数では弓術、馬術、ビーチバレーにおいて1.5倍を越える申込数があり、こうした人気種目への対応を今後検討していく必要がある。

表Ⅲ-1-5. 平成20年度 体育実技A・B（シーズンスポーツクラス）担当者及び履修状況

	月	科 目 名	担当者	定員	登録数	倍率	最 終 履修者数	充足率
春 学 期	7 ― 8 月	空手	久保田正美	40	15	0.38	19	48%
		弓術	齋藤 隆男	40	63	1.58	39	98%
		水泳（オープンウォータースイミング）	鷲見 全弘	25	12	0.48	14	56%
		馬術（Ｂ）	細田 壮一	32	54	1.69	32	100%
		山岳（Ｂ）	丸 誠一郎	20	13	0.65	18	90%
		ヨット（Ｂ）	金子 隆司	40	32	0.80	36	90%
秋 学 期	9 月	アウトドアレクリエーション（Ｂ）	野口 和行	50	48	0.96	48	96%
		器械体操	首藤 聡史	30	18	0.60	22	73%
		ビーチバレー（Ｂ）	石手 靖	30	46	1.53	46	153%
	2 月	スキー（Ｂ）	吉田 久男	120	52	0.43	63	53%
		スケート（Ｂ）	小山 正	40	43	1.08	43	108%
計				467	396	0.85	380	81%

2. 授業評価の実施

体育研究所では、長年継続的に体育実技を履修した学生による授業評価を実施し、より適切な授業展開のための基礎資料を得て、授

業改善に努めている。

また、Web によるアンケート回収の試みを平成18年度秋学期から開始し、19年度（前年）は教育委員会の教員の種目において実施

してきた。本年20年度からは、専任教員中の希望者に Web アンケートを拡大し、春学期は15名、秋学期16名の専任教員が Web アンケートを実施した。なおその他の専任教員及び非常勤講師・実技指導員の授業では紙による回収を実施した。

Web アンケートの実施は授業時間内の実施に対して回収率が悪くなることが課題であり、18年度は20%、19年度春学期30%、秋学期50%と推移してきていたが、20年度は春学期60%、秋学期53%と増加傾向となった（いずれも各時限の回答率の平均値）。実施に際しては、授業終了3週間前より入力可能とし、回答人数を毎日把握し、未実施者に残りの授業で実施を促した。また、携帯電話からの回答を促進するため QR コード票を記載した説明用紙を配布した。授業開始前後の時間に携帯電話から実施を促すことで回答率が向上しやすいが、通信費の負担を拒むケースや、電波圏外の実施場所（協生館地下体育施設等）もあり、必ずしも有効でないこともある。しかしながら、Web 実施のメリットの1つに、自由記述の回答が充実する点が挙げられる。授業現場での実施では時間内に早く終えようという意識からか、記述部分が軽視されることが多い。しかし、後からじっくりと回答をする場合、自然と記述に意見を書きやすいのではないかと考えられる。こうした点からも、今後も Web 実施を有効に活用することを検討したい。

以下、Web、紙面アンケートとも同一に扱い集計を行った。表Ⅲ-1-6、表Ⅲ-1-7に授業評価アンケートの回答数及びアンケートの質問項目を示す。アンケートの各質問項目には、「強くそう思う」（5点）から「まったくそう思わない」（1点）までの5段階で回答させ、得点化して評価した。

表Ⅲ-1-6. アンケート回答者数

	アンケート総数
春学期ウィークリー	1794
秋学期ウィークリー	1542
春学期講義・演習	92
秋学期講義・演習	54
シーズン	248

1) 体育実技ウィークリー種目の授業評価

春学期および秋学期ウィークリー実技における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-1, 2に示す。結果を見るとほぼ例年と同じであり以下のようにまとめられる。

春・秋の学期間には差はほとんどなく、同じ傾向が得られている。全般に4点以上の肯定的評価がほとんどであった。平均値で最も高い評価となったものは、「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」であり、目的の説明や話し方、教授法の適切さ等の教員に対する評価項目が高い得点であった。一方、最も平均点が低いものは、「この授業によって運動技術が向上した」であり、「この授業によって知識を深めることができた」「運動量は適切であった」といった項目も全体の中では比較的低い評価であった。

表Ⅲ-1-8, 9には各項目の種目別の集計を春学期、秋学期別に示した。こちらも同様に、例年と同じ傾向が見られた。すなわち、全体の評価からは、「運動技術が向上」「運動量の適切さ」などの得点が低かった。これまで、ニュースポーツ、ウォーキングエクササイズ、ジョギング、アーチェリー、フェンシング、自動車などが3点台の低い評価となることが多かった。その内、本年も昨年に引き続き、ニュースポーツ、フェンシングに改善傾向が見られた。

表Ⅲ-1-7. アンケート調査用紙（表裏）

平成20年度体育科目（講義・演習・実技）履修者アンケート

慶應義塾大学体育研究所

このアンケートは、FD「Faculty Development：大学教員の資質開発（授業内容、方法の改善・向上）」をめざして行われるものです。皆さんの意見を次年度以降の授業に反映させるとともに、今後の塾内のスポーツ振興に対して役立てる目的以外には用いませんので率直な意見をお聞かせください

・科目名を記入してください _____

・担当教員名を記入してください _____

・学期に○印 （ 春 ・ 秋 ）

・曜日時限に○印 （ 月・火・水・木・金 ）曜、（ 1・2・3・4 ）限

・実施地区に○印 日吉 ・ 三田

● 受講した授業についての以下の質問に関して、

5 _____ 4 _____ 3 _____ 2 _____ 1
 強くそう思う そう思う どちらとも言えない そう思わない 全くそう思わない
 の5つの中から一番当てはまる番号に○印を付けてください。

履修者全員（講義・演習・実技）回答

- | | |
|-----------------------------|-------------------|
| 1. 教員は授業の目的および目標をわかりやすく説明した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 2. 教員の指導・教授方法は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 3. 教員はこの授業についての十分な知識を持っていた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 4. 教員は授業への学生の参加を促し、適切に助言した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 5. 教員の話し方は聞き取りやすかった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 6. この授業は塾生にとってふさわしいものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 7. この授業は自分にとって満足出来るものであった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 8. この授業によって知識を深めることができた | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 9. この授業の内容は興味のあるものだった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 10. このクラスの雰囲気は良好であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 11. 自分はこの授業に意欲的に取り組んだ | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

実技履修者のみ回答

- | | |
|------------------------|-------------------|
| 12. この授業は健康や体力の向上に役立った | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 13. この授業によって運動技術が向上した | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
| 14. 運動量は適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |

講義・演習履修者のみ回答

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| 15. この授業では配布資料やプレゼンテーションが適切であった | 5 — 4 — 3 — 2 — 1 |
|---------------------------------|-------------------|

裏面へ続きます

●自由記述 1

授業内容について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述 2

教員について
よかったこと：

改善を要すること：

●自由記述 3

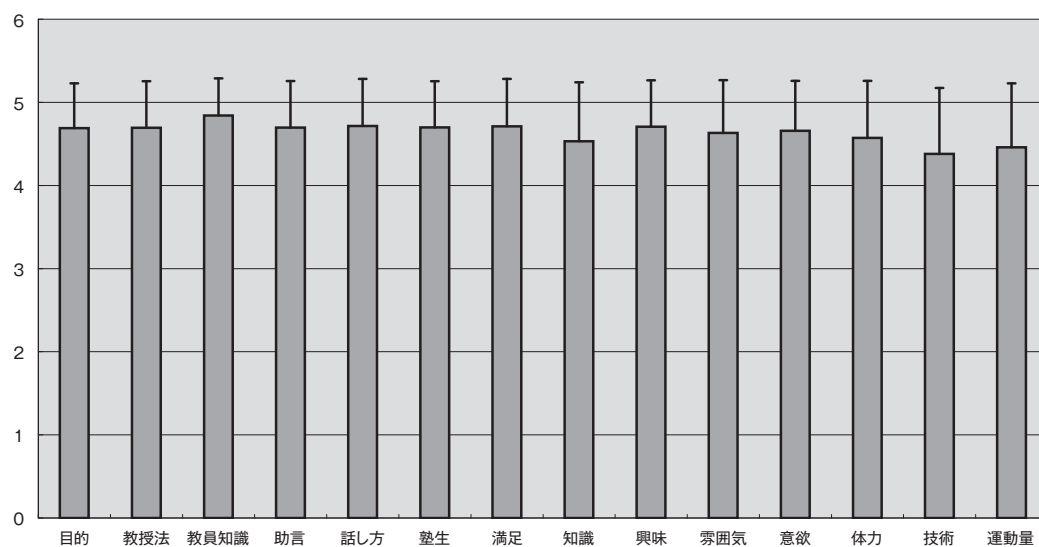
施設および機器・用具等について
よかったこと：

改善を要すること：

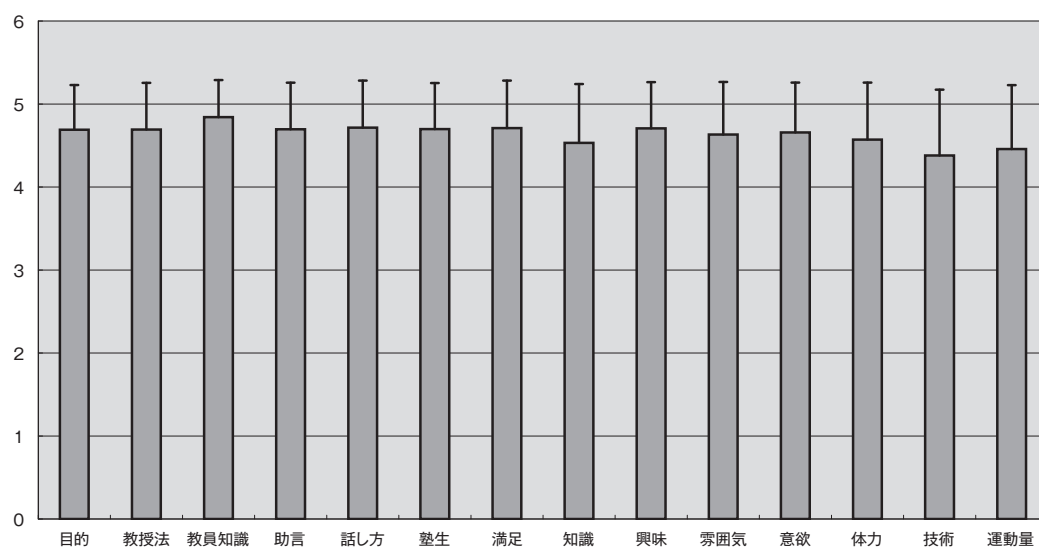
●自由記述 4

体育科目全般に関する意見および提案

ご協力ありがとうございました



図Ⅲ-1-1. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期ウィークリー全体平均）



図Ⅲ-1-2. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期ウィークリー全体平均）

表Ⅲ-1-8. 種目別の5段階評価集計一覧（春学期ウィークリー）

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
サッカー	131	平均	4.8	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8	4.8	4.6	4.8	4.8	4.7	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	0.4	0.4	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	0.8	0.8
フットサル	44	平均	4.6	4.7	4.9	4.8	4.9	4.9	4.9	4.6	4.9	4.8	4.7	4.9	4.7	4.5
		標準偏差	0.5	0.5	0.3	0.5	0.3	0.3	0.3	0.6	0.3	0.5	0.6	0.3	0.5	0.8
ソフトテニス	8	平均	4.6	4.8	4.8	5.0	4.8	4.6	4.8	4.1	4.6	4.6	4.3	4.6	4.5	4.6
		標準偏差	0.5	0.7	0.5	0.0	0.5	0.7	0.5	1.1	0.5	0.7	1.0	0.7	0.8	0.5
テニス	193	平均	4.6	4.7	4.9	4.7	4.7	4.7	4.6	4.5	4.7	4.6	4.7	4.6	4.6	4.4
		標準偏差	0.7	0.6	0.4	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.8
卓球	123	平均	4.5	4.6	4.7	4.6	4.6	4.6	4.6	4.3	4.6	4.6	4.6	4.4	4.3	4.4
		標準偏差	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7	0.6	0.8	0.6	0.6	0.6	0.8	0.9	0.8
バドミントン	185	平均	4.6	4.6	4.8	4.5	4.5	4.6	4.6	4.5	4.6	4.4	4.5	4.5	4.3	4.4
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.7	0.8	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.7	0.7	0.8	0.6
バスケットボール	271	平均	4.8	4.8	4.9	4.9	4.8	4.9	4.9	4.6	4.9	4.8	4.9	4.9	4.7	4.8
		標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6	0.5
バレーボール	211	平均	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.7	4.3	4.6	4.6	4.6	4.4	4.2	4.3
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.9	0.7	0.6	0.6	0.8	0.9	0.8
野球	21	平均	4.7	4.8	5.0	4.5	4.7	4.8	4.6	4.5	4.8	4.6	4.6	4.4	4.5	4.5
		標準偏差	0.6	0.4	0.2	0.7	0.6	0.5	0.6	0.7	0.4	0.6	0.7	0.7	0.7	0.7
軟式野球	23	平均	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.5	4.4	4.7	4.7	4.7	4.5	4.3	4.5	4.3
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.6	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6
合気道	48	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.4	4.3	4.5
		標準偏差	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.3	0.5	0.4	0.5	0.5	0.7	0.9	0.9	0.8
柔道	35	平均	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.8	4.7	4.8	4.9	4.8	4.7	4.9	4.6	4.5
		標準偏差	0.3	0.3	0.2	0.4	0.4	0.5	0.6	0.5	0.4	0.5	0.5	0.3	0.7	0.6
剣道	36	平均	4.6	4.6	5.0	4.5	4.7	4.7	4.6	4.6	4.6	4.5	4.4	4.2	3.9	4.0
		標準偏差	0.5	0.5	0.0	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	0.7	0.8	0.8
フェンシング	7	平均	4.9	4.9	5.0	4.7	4.6	4.7	4.9	4.9	4.9	4.4	4.9	4.6	4.7	4.6
		標準偏差	0.4	0.4	0.0	0.5	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.8	0.4	0.5	0.5	0.5
体力UPコース	113	平均	4.8	4.7	4.9	4.6	4.8	4.6	4.6	4.5	4.5	4.3	4.4	4.6	4.1	4.2
		標準偏差	0.4	0.6	0.4	0.6	0.4	0.6	0.6	0.6	0.6	0.8	0.6	0.6	0.8	0.7
ボディメイクエクササイズ	14	平均	4.9	4.9	4.8	4.6	4.9	4.9	4.7	4.5	4.6	4.6	4.6	4.6	3.9	4.7
		標準偏差	0.3	0.4	0.8	0.6	0.3	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.5
エアロビクス	58	平均	4.7	4.9	4.8	4.6	4.8	4.7	4.8	4.3	4.6	4.6	4.7	4.6	3.9	4.3
		標準偏差	0.5	0.3	0.4	0.6	0.4	0.5	0.4	0.8	0.7	0.6	0.8	0.6	0.8	0.8
ダンス	46	平均	4.4	4.2	4.9	4.4	4.6	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.6	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	0.7	1.0	0.5	0.7	0.6	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7
ウォーキングエクササイズ	32	平均	4.6	4.5	4.7	4.5	4.7	4.4	4.7	4.4	4.5	4.6	4.6	4.5	3.8	4.1
		標準偏差	0.6	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.5	0.8	0.7	0.6	0.7	0.6	0.9	0.9
ジョギング	22	平均	4.3	4.5	4.7	4.2	4.5	4.3	4.5	3.9	4.1	4.5	4.2	4.5	3.6	3.9
		標準偏差	0.6	0.5	0.5	0.7	0.5	0.7	0.8	0.8	0.8	0.6	0.5	0.7	0.8	0.9
ゴルフ	41	平均	4.7	4.7	4.8	4.6	4.8	4.7	4.7	4.6	4.8	4.4	4.7	4.3	4.7	4.5
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.7	0.4	0.5	0.5	0.6	0.5	0.7	0.5	0.8	0.5	0.7
自動車	41	平均	4.7	4.7	4.8	4.6	4.7	4.6	4.7	4.6	4.7	4.4	4.6	3.8	3.9	4.0
		標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.7	0.5	0.7	0.5	0.5	0.5	0.9	0.6	1.2	1.0	1.1
アーチェリー	34	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.7	4.7	4.8	4.8	4.9	4.6	4.9	4.2	4.1	4.1
		標準偏差	0.4	0.3	0.2	0.4	0.6	0.6	0.4	0.5	0.4	0.7	0.3	0.8	0.9	1.0
トランポリン	36	平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.5	4.6	4.4
		標準偏差	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.5	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.9
弓術	21	平均	4.8	4.7	5.0	4.7	4.6	4.8	4.7	4.5	4.8	4.7	4.7	4.3	4.1	4.2
		標準偏差	0.7	0.7	0.2	0.7	0.9	0.5	0.6	0.7	0.8	0.7	0.5	0.7	0.8	0.9

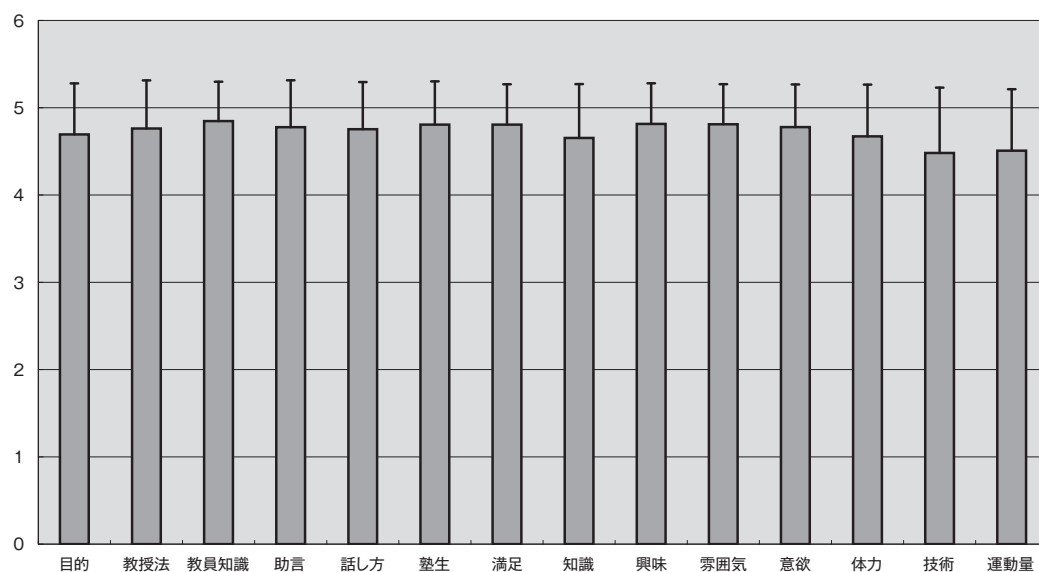
表Ⅲ-1-9. 種目別の5段階評価集計一覧（秋学期ウィークリー）

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
サッカー	113	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	4.8	4.7	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7
		標準偏差	0.4	0.4	0.3	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4	0.5	0.5	0.5	0.7	0.5
フットサル	42	平均	4.5	4.7	4.8	4.7	4.8	4.6	4.7	4.2	4.7	4.6	4.6	4.7	4.5	4.6
		標準偏差	0.7	0.6	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7	1.0	0.7	0.6	0.6	0.6	0.8	0.6
ソフトテニス	2	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	4.5	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
テニス	165	平均	4.7	4.7	4.9	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.6
		標準偏差	0.6	0.5	0.4	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.5	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7
卓球	108	平均	4.6	4.6	4.8	4.5	4.6	4.6	4.5	4.3	4.6	4.7	4.6	4.3	4.3	4.4
		標準偏差	0.6	0.7	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	1.0	0.7	0.6	0.7	0.9	0.9	0.8
バドミントン	159	平均	4.6	4.5	4.8	4.4	4.6	4.6	4.6	4.4	4.7	4.6	4.6	4.5	4.4	4.4
		標準偏差	0.5	0.6	0.5	0.7	0.7	0.6	0.6	0.7	0.6	0.6	0.6	0.7	0.7	0.8
バスケットボール	221	平均	4.8	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.9	4.6	4.9	4.9	4.8	4.9	4.7	4.8
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4	0.6	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6	0.5
バレーボール	139	平均	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.7	4.3	4.7	4.7	4.5	4.4	4.3	4.3
		標準偏差	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.9	0.6	0.6	0.8	0.7	0.8	0.9
野球	22	平均	4.6	4.6	4.9	4.5	4.7	4.5	4.5	4.4	4.7	4.7	4.6	4.2	4.4	4.4
		標準偏差	0.6	0.6	0.4	0.8	0.7	0.8	0.7	1.2	0.6	0.7	0.8	1.2	1.0	0.8
軟式野球	15	平均	5.0	5.0	5.0	5.0	4.9	4.9	5.0	4.8	4.9	5.0	4.9	4.5	4.5	4.5
		標準偏差	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.3	0.0	0.4	0.3	0.0	0.3	0.6	0.6	0.6
ハンドボール	22	平均	4.7	4.4	4.9	4.4	4.6	4.4	4.6	4.5	4.7	4.4	4.5	4.6	4.5	4.0
		標準偏差	0.5	0.8	0.4	0.6	0.7	0.7	0.7	0.8	0.7	1.0	0.9	0.7	0.7	0.9
合気道	42	平均	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	5.0	4.9	4.9	4.9	5.0	4.8	4.3	4.1	4.2
		標準偏差	0.0	0.2	0.0	0.3	0.0	0.2	0.4	0.4	0.4	0.2	0.5	1.0	1.1	1.0
柔道	27	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.9	5.0	4.9	4.8	4.9	5.0	4.5	4.7	4.5	4.4
		標準偏差	0.5	0.3	0.0	0.3	0.3	0.2	0.3	0.5	0.3	0.2	0.8	0.5	0.8	0.7
剣道	27	平均	4.8	4.9	5.0	4.7	4.8	4.8	4.9	4.7	4.8	4.5	4.5	4.4	4.3	4.4
		標準偏差	0.4	0.3	0.0	0.5	0.4	0.5	0.3	0.5	0.4	0.5	0.5	0.6	0.7	0.6
フェンシング	7	平均	4.6	4.6	4.9	4.9	4.7	4.6	4.9	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.3	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.4	0.4	0.5	0.8	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	0.5	1.0	0.5
ボクシング	21	平均	4.9	4.8	5.0	4.7	4.8	4.5	4.8	4.8	4.8	4.5	4.7	4.6	4.3	4.5
		標準偏差	0.3	0.5	0.2	0.6	0.5	0.6	0.4	0.4	0.4	0.6	0.5	0.6	0.8	0.7
体力UPコース	95	平均	4.7	4.6	4.8	4.4	4.7	4.4	4.6	4.3	4.5	4.3	4.4	4.5	4.0	4.1
		標準偏差	0.5	0.6	0.4	0.7	0.5	0.8	0.6	0.7	0.7	0.8	0.7	0.6	0.9	0.8
ボディメイクエクササイズ	14	平均	4.7	4.8	4.8	4.8	4.9	4.7	4.9	4.7	4.8	4.7	4.5	4.7	4.4	4.5
		標準偏差	0.5	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.3	0.5	0.4	0.5	0.7	0.5	0.7	1.0
エアロビクス	67	平均	4.7	4.8	4.8	4.5	4.8	4.6	4.7	4.3	4.7	4.5	4.5	4.6	3.9	4.3
		標準偏差	0.5	0.4	0.5	0.6	0.4	0.6	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	0.6	0.8	0.7
ダンス	12	平均	4.8	4.9	5.0	4.9	4.8	4.9	4.9	4.7	4.9	4.9	4.7	4.5	4.3	4.8
		標準偏差	0.5	0.3	0.0	0.3	0.4	0.3	0.3	0.5	0.3	0.3	0.5	0.7	0.8	0.5
ウォーキングエクササイズ	48	平均	4.8	4.6	4.9	4.6	4.6	4.5	4.7	4.4	4.4	4.5	4.6	4.6	3.6	4.4
		標準偏差	0.4	0.5	0.3	0.5	0.6	0.6	0.4	0.5	0.6	0.7	0.7	0.5	0.9	0.6
陸上競技	3	平均	4.3	5.0	5.0	4.7	5.0	4.3	5.0	4.3	4.7	5.0	4.7	4.7	4.7	4.3
		標準偏差	0.6	0.0	0.0	0.6	0.0	0.6	0.0	1.2	0.6	0.0	0.6	0.6	0.6	0.6
ジョギング	9	平均	4.2	4.3	4.8	4.4	4.3	4.7	4.7	4.1	4.1	4.7	4.4	4.3	3.2	3.8
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	0.5	0.5	0.8	0.3	0.7	0.5	0.9	0.7	0.4
ゴルフ	27	平均	4.6	4.7	4.9	4.5	4.9	4.7	4.7	4.7	4.8	4.5	4.7	4.3	4.6	4.4
		標準偏差	0.6	0.5	0.3	0.8	0.5	0.6	0.6	0.7	0.4	0.9	0.5	0.8	0.6	0.7
自動車	24	平均	4.8	4.8	4.9	4.6	4.8	4.6	4.7	4.6	4.8	4.3	4.6	3.6	4.1	3.7
		標準偏差	0.4	0.5	0.4	0.6	0.5	0.7	0.6	0.5	0.4	0.6	0.7	1.1	1.1	1.0
アーチェリー	27	平均	4.7	4.9	5.0	4.7	4.7	4.7	4.8	4.6	4.8	4.8	4.7	4.1	4.0	4.2
		標準偏差	0.4	0.3	0.2	0.4	0.6	0.7	0.7	0.6	0.6	0.5	0.7	0.8	1.0	1.1
トランポリン	28	平均	4.9	4.9	5.0	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.9	5.0	4.8	4.6	4.5	4.5
		標準偏差	0.3	0.3	0.2	0.3	0.3	0.4	0.3	0.5	0.3	0.2	0.6	0.6	0.7	0.7
弓術	19	平均	4.6	4.6	4.8	4.6	4.7	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	4.6	4.4	4.2	4.2
		標準偏差	0.8	0.7	0.7	0.8	0.7	0.5	0.4	0.5	0.5	0.4	0.8	0.7	1.0	0.9
フライングディスク	22	平均	4.5	4.5	4.8	4.4	4.8	4.6	4.6	4.3	4.7	4.3	4.1	4.0	3.7	4.2
		標準偏差	0.6	0.6	0.5	0.6	0.4	0.6	0.7	0.7	0.5	0.6	0.9	0.7	1.1	0.7
ニュースポーツ	15	平均	4.4	4.6	4.8	4.5	4.9	4.6	4.6	4.7	4.6	4.7	4.7	4.3	4.3	4.1
		標準偏差	1.1	0.5	0.4	0.7	0.4	0.6	0.5	0.5	0.5	0.6	0.5	0.6	0.6	1.4

2) シーズンスポーツ種目の授業評価

シーズンスポーツ種目における各項目の全体の平均値と標準偏差を図Ⅲ-1-3に示す。ウィークリー種目同様に、すべての項目とも平均値で4点をこえる肯定的評価が得られている。また、評価の高い項目の「教員はこの授業についての十分な知識を持っていた」、

課題となる「運動量は適切であった」「この授業によって運動技術が向上した」の特徴もウィークリーに類似し、かつ昨年と同様の傾向となった。また、表Ⅲ-1-10には各項目の種目別の集計を示した。こちらもほぼ例年同様の結果となった。



図Ⅲ-1-3. 授業に関する質問項目別の5段階評価 (シーズンスポーツ全体平均)

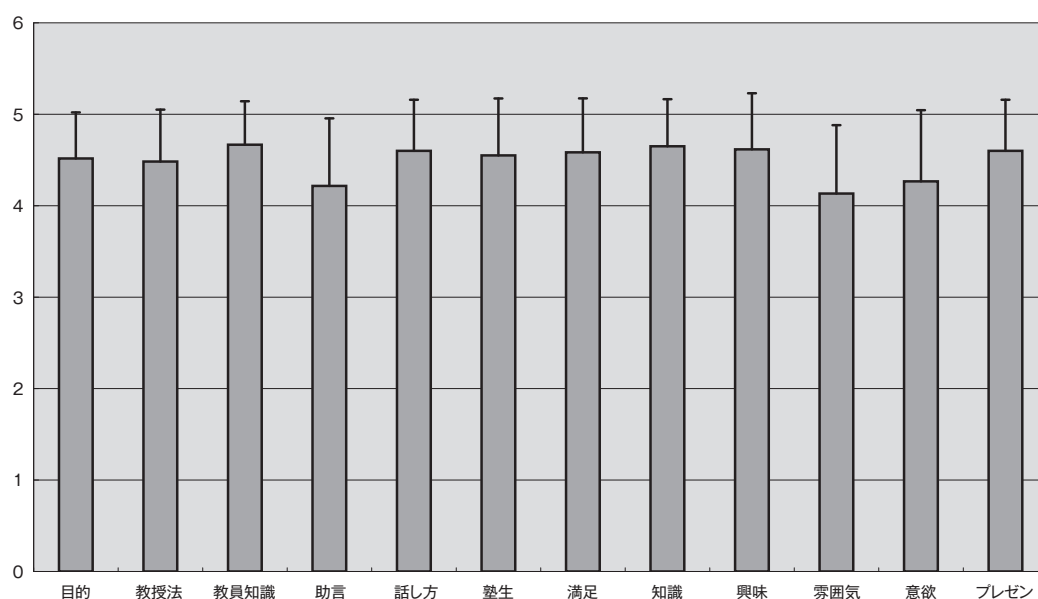
表Ⅲ-1-10. 種目別の5段階評価集計一覧 (シーズンスポーツ)

種目名	人数		目的	教授法	教員知識	助言	話し方	塾生	満足	知識	興味	雰囲気	意欲	体力	技術	運動量
空手	13	平均	4.8	5.0	4.8	4.9	5.0	5.0	4.9	4.2	4.7	4.8	4.8	4.7	4.5	4.5
		標準偏差	0.4	0.0	0.6	0.3	0.0	0.0	0.3	0.9	0.6	0.6	0.6	0.6	0.7	0.8
弓術	25	平均	4.8	4.8	5.0	4.8	4.7	4.8	4.7	4.6	4.9	4.9	4.8	4.4	4.3	4.4
		標準偏差	0.4	0.4	0.2	0.5	0.6	0.4	0.5	0.6	0.3	0.3	0.4	0.7	0.9	0.7
水泳(オープンウォータースイミング)	13	平均	4.8	4.8	4.8	5.0	4.8	4.8	4.7	4.5	4.6	4.8	4.8	4.8	4.5	4.5
		標準偏差	0.4	0.4	0.6	0.0	0.4	0.4	0.5	0.7	0.5	0.4	0.4	0.4	0.7	0.7
山岳	12	平均	4.5	4.8	4.7	4.7	4.8	4.5	4.8	4.5	4.6	4.5	4.4	4.6	3.9	4.4
		標準偏差	0.7	0.5	0.9	0.7	0.5	0.9	0.5	0.5	0.5	0.5	0.7	0.7	0.8	0.7
馬術	18	平均	4.9	5.0	5.0	4.9	5.0	5.0	5.0	4.9	5.0	5.0	5.0	4.8	4.7	4.5
		標準偏差	0.3	0.0	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.4	0.6	0.8
ヨット	31	平均	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.9	4.9	4.8	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.7
		標準偏差	0.7	0.7	0.5	0.6	0.7	0.2	0.4	0.5	0.2	0.5	0.5	0.5	0.6	0.6
ビーチバレー	18	平均	4.7	4.7	4.8	4.9	4.9	4.8	4.7	4.6	4.8	4.9	4.8	4.7	4.4	4.6
		標準偏差	0.5	0.5	0.5	0.3	0.2	0.5	0.7	0.7	0.7	0.3	0.4	0.5	1.0	0.7
アウトドアレクリエーション	36	平均	4.9	4.9	4.9	4.9	4.8	4.8	4.9	4.6	4.8	4.8	4.8	4.7	4.2	4.5
		標準偏差	0.4	0.3	0.4	0.4	0.6	0.5	0.4	0.6	0.5	0.4	0.4	0.6	0.8	0.7
スケート	26	平均	4.7	4.8	4.9	4.9	4.7	4.8	4.9	4.6	4.9	4.9	4.8	4.5	4.6	4.6
		標準偏差	0.5	0.4	0.3	0.4	0.6	0.5	0.3	0.8	0.4	0.3	0.4	0.8	0.6	0.6
スキー	43	平均	4.4	4.4	4.7	4.5	4.6	4.7	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.7	4.6	4.4
		標準偏差	0.8	0.8	0.5	0.7	0.7	0.6	0.5	0.5	0.6	0.7	0.7	0.6	0.7	0.8

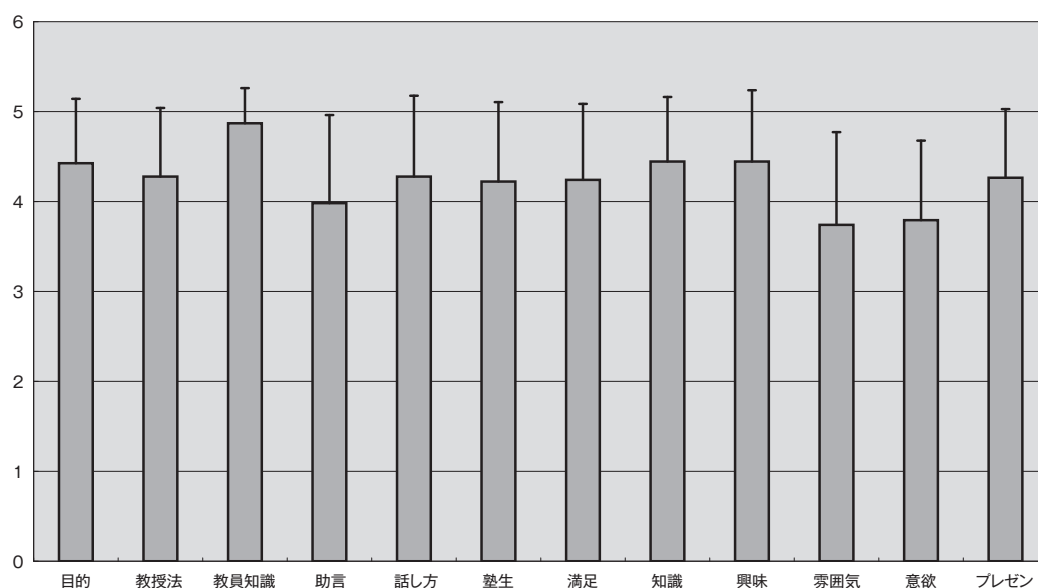
3) 講義・演習科目の授業評価

講義・演習科目の授業評価について春学期、秋学期別に集計した結果を図Ⅲ-1-4, 5に示す。昨年同様に春・秋学期間にやや差が見られた。春学期はおおむね高い評価を得ているが、秋学期では評価が低い項目が多いようである。今年顕著なのは、春も秋も「教員は授業への参加を促し、適切に助言した」の項目が低かった。また、「このクラスの雰囲気は良好であった」「自分はこの授業に意欲的に

取り組んだ」も例年通り低い評価であった。一方で「教員の知識」や「授業目的の把握」などが高い評価を得ており、「プレゼンテーションの適切さ」も昨年よりも評価が高くなった。従って、やや教員側の一方的な教授になりがちであるのかもしれない。講義ではオムニバスが中心で、学生とのコミュニケーションが深まらない現状があると感じる。今後の課題となる点である。



図Ⅲ-1-4. 授業に関する質問項目別の5段階評価（春学期講義・演習の全体平均）



図Ⅲ-1-5. 授業に関する質問項目別の5段階評価（秋学期講義・演習の全体平均）

3. 通信教育部対象の科目

1) 体育理論

通信教育課程の体育理論は平成19年度に引き続き、テキスト科目のレポート並びに試験問題の出題・採点を佐々木玲子君、村山光義君、村松憲君で担当した。また、夏期スクーリング（平成20年7月31日（木）から8月7日（木）の日曜を除く7日間）においても保健体育科目として体育理論・保健衛生をオムニバス形式で実施した。体育理論はテキスト科目出題と同様の3名で担当した。スクーリングでの各教員のテーマを表Ⅲ-1-11に示す。

2) 体育実技

夏期・冬期スクーリングにおいて体育実技を開講した。夏期は、平成20年7月31日（木）から8月7日（木）の日曜を除く7日間、12種目を日吉キャンパスにて午前中の1-2時限（2時間15分間）実施した。今年度から太極拳を開講し、新棟であるスポーツ棟2F講義室1・2を1部屋として実施した。申込者も大変多く、抽選となったが、履修者にとっては好評であった。また、冬期は平成21年2月7日（土）から2月10日（火）までの3泊4日でスキーを戸狩温泉スキー場で実施した。各担当者及び履修者数を表Ⅲ-1-12に示す。

表Ⅲ-1-11. 平成20年度通信教育部講義開講科目および担当者一覧

	担 当 者	テ ー マ
保 健 衛 生	齊 藤 郁 夫	高血圧
	河 邊 博 史	糖尿病
	和井内 由充子	虚血性心疾患
	辻 岡 三南子	医学とスポーツ
	徳 村 光 昭	子どもの生活習慣
	南 里 清一郎	エイズ
体 育 理 論	佐々木 玲 子	人の成長と加齢に伴う身体機能の変化
	村 山 光 義	スポーツと人間の関係及びその教育的意義
	村 松 憲	身体のしくみ・運動のしくみ・トレーニングのしくみ

表Ⅲ-1-12. 平成20年度通信教育部体育実技スクーリング開講種目および担当者一覧

	種 目 名	担当者	定 員	履修者数	充足率
夏 期	ウォーキングエクササイズ	近藤 明彦	30	26	86.7%
	エアロビクス	佐々木玲子	20	19	95.0%
	剣道	吉田 泰将	20	11	55.0%
	ゴルフ	勝又 正浩	20	19	95.0%
	柔道	安藤 勝英	20	12	60.0%
	ソフトボール	綿田 博人	25	20	80.0%
	体力アップコース	山内 賢	20	16	80.0%
	卓球	松田 雅之	30	27	90.0%
	バスケットボール	加藤 大仁	25	20	80.0%
	バドミントン	加藤 幸司	40	29	72.5%
	テニス	村松 憲	20	16	80.0%
	太極拳	孔 徳勝	20	19	95.0%
	バレーボール	石手 靖	30	25	83.3%
	レクリエーションスポーツ	村山 光義	25	20	80.0%
冬期	スキー	水野 英夫	70	45	64.3%
	合 計		415	279	67.2%

4. 他学部および塾内における授業協力

体育研究所所員は、日吉・三田において開講される体育研究所設置の体育科目および通信教育部のテキスト科目・スクーリング科目に加え、各学部・センターの設置科目や一貫

教育校の授業についても研究所所員が協力をしている。平成20年度の協力科目および担当者を表Ⅲ-1-13に示す。今後もこうした塾内における共同参画型の授業を発展させたいと考える。

表Ⅲ-1-13. 塾内における授業担当および協力

授 業 科 目 名	担 当 者	開講学部など	曜日時限など
生命の教養学	吉田泰将	教養研究センター 設置科目	春学期金曜 3 時限
体育Ⅰ、体育Ⅱ・Ⅲ	牛山潤一	総合政策学部 環境情報学部	金曜 3、4、5 時限
人体の科学	佐々木玲子、村山光義	理工学部	秋学期水曜 5 時限

Ⅲ-2 スポーツイベントの開催

1. 塾長杯・塾内競技大会

1) 塾長杯フットサル大会

1. 開催日：平成20年6月22日（日）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：10:00～18:00
4. 参加チーム数：32チーム
5. 参加者数：約370名（登録選手数270名、観客約100名）
6. 試合数：55試合（1試合15分間）
予選リーグ48試合
決勝トーナメント7試合
7. 協 力：体育会サッカー部
放送研究会（K-Sound）
ユニコーンズ・ソングリーダーズ
大塚製薬（株）
8. 参加チーム抽選会：平成20年6月10日
（火）18:30～20:00 16番教室
9. 応募チーム数：88チーム
10. 結 果
優勝：てんぐ
2位：リバーズ
3位：エリナスマイル
無線ラジオ研究会
11. コメント：本大会では、抽選会を昨年と違い、事前にメールでの登録する方法より、代表者を抽選会当日に集めてエントリーをする方法を行った。88チームのエントリーより、32チームを抽選する際、昨年大会準決勝に進出することにより獲得したしード権を持つ4チームを除く28個の出場枠と2個のリザーブ枠を賭けた抽選を行った。

無線ラジオ研究会

一喜一憂して選ばれた参加チームは、大会当日集合時間より早く集まり練習する様子が多数記念館外でみられ、改めてこの大会に賭ける各チームの意気込みを感じることができた。出場するだけでも、ここ数年倍率が3-4倍となっており、

シード権の確保が各チームの最初の目標となっており、そして優勝の栄冠を賭けた激しい試合がいくつも繰り広げられた。

この塾長杯フットサル大会は、塾生のための塾生による運営が行われており、それに協力してくれている体育会サッカー部、放送研究会、ユニコーンズ・ソングリーダーズの企画・運営、音響とハーフタイムショー等の演出がなくては、成り立たない。試合を観戦している塾生達も精一杯選手達を応援してくれたことにより、爽やかな大会であると同時に白熱した大会となった。



2) 第10回記念塾長杯バレーボール大会2008

1. 開催日：平成20年10月5日（日）
2. 会 場：日吉記念館
3. 開催時間：9:30～19:30
4. 参加チーム数：53チーム（チャンピオンリーグ17、エンジョイクラス36）
5. 約620名（チャンピオンリーグ153名、エンジョイクラス365名、観客数約100名）
6. ゲーム数：54ゲーム
予選リーグ45試合 / 決勝トーナメント11試合
7. 協 力：大会実行学生スタッフ / ヒヨシエイジ / 放送研究会（K-Sound） / チア & ソングリーダーズユニコーンズ / 大塚製薬（株）

8. 表彰チーム

チャンピオンリーグ

優勝：入院ズ

2位：Last Friends.～愛の呼ぶほうへ～

3位：三枚目のTシャツ

エンジョイクラス

優勝：慶應義塾大学日吉寄宿舍

2位：綱島BB

3位：KVFujio

9. コメント：大会にはチャンピオンリーグ17、エンジョイクラス36の計53チームが参加した。塾内のバレーボールサークルのメンバーが多数参加したチャンピオンリーグは、2、3、3、3、3、3 チームの計6ブロックに分かれてリーグ戦を行い、各ブロックの1位を勝敗、得失点差により1位から6位まで順位付けした。その順位付けに基づき決勝リーグ進出トーナメントを行い3チームに絞り、決勝リーグを行った。また、エンジョイクラスは例年と変わらず女子の参加も多く、エントリーした全チームの間でトーナメントが行われた。

チャンピオンリーグ・エンジョイクラスともに白熱のゲームが続いて盛り上がり、恒例のユニコーンズによるソングリーディングも披露された。さらに放送研究会のアナウンスが試合進行の円滑化と大会の盛り上げに大きな貢献をした。



3) 塾内バスケットボール大会

1. 開催日：平成20年12月6日（土）

2. 会場：日吉記念館

3. 開催時間：9:30～18:00

4. 参加チーム数：24チーム

5. 参加者数：約280名（登録選手約180名、観客約100名）

6. 試合数（1試合8分×2）

エンジョイリーグ

予選リーグ戦18試合、決勝トーナメント7試合

メインリーグ

予選リーグ戦18試合、決勝トーナメント7試合

7. 協力：放送研究会（K-Sound）

ユニコーンズ・ソングリーダーズ

大塚製薬（株）

8. 参加チーム抽選会：平成20年12月2日（火） 18:00～20:00 スポーツ棟2階講義室

9. 応募チーム数：51チーム

10. 結果

メインリーグ

優勝：KBC

2位：わっ th あーず

3位：鳩バスA

じゃがいもに勝った男たち

エンジョイリーグ

優勝：KBC

2位：5!5! スチレンボーダーズ

3位：Reggie's

Lバス（桜）

11. コメント：本年度も多数の参加希望チームの中から抽選により、メインリーグ18チーム、エンジョイリーグ18チームによるリーグ戦及びトーナメントによる熱戦が繰り広げられた。昨年に引き続き、バスケットボールの授業を履修した学生の有志がポスター作成や組み合わせ、当日の大会運営を行った。また、当日の音

響や実況は放送研究会・K-sound が、ハーフタイムショーはユニコーン。ソングリーダーズが華やかに大会を彩った。また、審判は日本体育大学バスケットボール部の協力を仰いだ。試合が進むにつれて進行が遅れる等はあるが、これら学生による大会運営は、体育研究所の使命である塾内のスポーツ振興に大きな役割を果たしていると思われる。



4) 塾内卓球大会

1. 開催日：平成20年12月7日（日）
2. 会 場：日吉卓球場
3. 開催時間：9:30～16:00
4. 参加者：延べ46名（最強卓球シングルス12名、最強卓球ダブルス7ペア、温泉ピンポンシングルス12名、温泉ピンポンダブルス4ペア）
5. ゲーム形式：11点先取3セットマッチ
6. 結 果

【最強卓球シングルス】

- 優勝：沢雄大
 2位：須見和史
 3位：安藤秀起
 4位：長谷川裕一

【最強卓球ダブルス】

- 優勝：沢雄大&安藤秀起ペア
 2位：宮本隆人&水上義男ペア

【温泉ピンポンシングルス】

- 優勝：斉藤綾介
 2位：中江吉雄

- 3位：鈴木悌二

【温泉ピンポンダブルス】

- 優勝：栗正樹&斉藤綾介
 2位：伊藤彬彦&小柴元
 3位：土井純也&河戸淳二

7. コメント：前日の塾長杯バスケットボール大会に引き続き、塾内卓球大会が、今年4月に完成したばかりの新卓球場で開催された。参加者は、塾生、大学院生、教職員のほか、昭和26年卒業の塾員である鈴木夫妻が4年ぶりに参加していただいた。従来の卓球場に比べ、室内照明、冷暖房、喚起等、設備はとても素晴らしいものであり、19歳から80歳までの幅広い年齢層によって、和気藹々と大会が行われた。大会は、総当たりとなるリーグ戦方式で行われ、順位決定が行われた。今回の大会は他のイベントとの兼ね合いで、開催時期が遅くなってしまった。次回はもう少し早い時期に開催できたらと考えている。



2. 公開講座

1) 健康ジョギング教室

1. 期 間：平成20年11月14（金）～12月1日（月）計5回
 （11/14金、17月、21金、28金、12/1月）
2. 時 間：18:00～19:30
3. 会 場：日吉陸上競技場及び協生館トレーニングルーム
4. 講 師：松田雅之（体育研究所准教授）：

- 瀬古利彦（S&B食品(株)陸上競技部部長）
5. 補助員：野口和行、加藤幸司、西村忍（体育研究所）
 6. 参加者：30名（男性7名、女性23名）
 7. 受講料：5,000円（教職員¥2,500）
 8. コメント：今回は教職員を中心に30名の参加があったが、塾生の参加やセントラルスポーツのトレーナーの参加があり、例年に比べ多彩な顔ぶれがそろった。

9月に新装となった全天候型陸上競技場は素晴らしく、参加者からも賛辞が多かった。全日程を通じて、ウォーキングやジョギングの効果的な実践方法（姿勢、歩幅等）を解説しながら、約1時間の講習を実施した。ジョギングの実施にあたり、心拍数の確認や、適正なジョギングスピードを指示した。事前にエアロバイクでVo2を測定した。高齢者や、初心者に対しては、ウォーキングとジョギングを複合させた無理のないペース配分を指示した。能力別にペースを変えて、1回の講習で3000m～4000mの距離を走った。11月28日には、毎年参加してくれている瀬古利彦氏を招き、競技場と一緒にランニングした。その後、協生館内にある、イングリッシュパブに於いて懇親会を開催した。

2) 第23回「スキーとスノーボードの集い」への講師派遣

1. 主 催：慶應義塾大学学生総合センター「大学生活懇談会」
2. 期 間：平成21年2月6日（金）～9日（月）
3. 場 所：新潟県妙高市 赤倉観光リゾートスキー場
4. 宿 舎：慶應義塾赤倉山荘
5. 引率教職員：伊東裕司（文学部）、石手靖・西村忍（体育研究所）、篠塚憲一・豊田紀子（学生総合センター）、水野宏紀（塾員・平20卒）、長野健（商4）

6. 参加者数：33名（男子23名、女子10名）
7. コメント：毎年恒例の「スキーとスノーボードの集い」が今年度も実施された。今回は、スノーボード希望者が21名となり、初めてスキー希望者を上回った。また4年生が15名も参加しており、学生生活最後の思い出として楽しみにしていることが窺えた。

初日 AM8:40、予定時刻より約10分遅れで三田キャンパスを出発し、トイレ休憩を2回挟み、赤倉山荘に到着。山荘管理人であり、今回のスキーインストラクターも兼ねて頂く望月光男氏の出迎えを受け昼食。一息つく間も無く身支度を整えゲレンデへ。スキー2班、スノーボード3班のレベル別講習を実施した。講習後は夕食、そして懇親会へと続き、各自自己紹介を行った。2日目は雲一つ無い快晴。講習も本格化し、各班のインストラクターの熱心な指導に、学生達が一生懸命付いていく姿がゲレンデのあちこちで見受けられた。午後の講習も終わり山荘へ戻ると、夕食までの小一時間少し時間は、雪上バレーボールを楽しんだ。3日目も快晴。午前中はやや風が吹いたが、午後には風が止み、絶好の講習日和となった。夕食後は最後の懇親会で盛り上がった。最終日は朝食後からバス出発までフリータイム。昼食を山荘で済ませ、予定時刻より早く出発し、無事に三田キャンパスに到着。

今回の「スキーとスノーボードの集い」は、体調不良やけが人もなく、天候にも恵まれた。学部学年の枠を超え、3泊4日という期間でスキーとスノーボードを楽しみながら、教職員も含め参加した全員が一つとなり、非常に有意義な交流の場となった。

IV. 特集 2

新しい陸上競技場と 協生館内大学体育施設の活用について

IV. 特集 2 新しい陸上競技場と協生館内大学体育施設の活用について

創立150年記念事業の一つとして、陸上競技場改修工事および付属施設建設工事が行われ2008年9月に完成した。主な工事はトラックの全天候型舗装改修とフィールドの人工芝化であり、以前の土のトラックと雑草の生えたフィールドから見れば劇的な変化となった。トラックの形状もこれまでの3芯円から単芯円となり、フィールドは投擲競技対応の世界初の人工芝を採用し公認競技場となった。また、競技場北側カーブ外部分に建設された付属施設には、地階に競技場の機器備品や体育実技使用物品を収納する広々とした倉庫と体育会競走部の部室、1階に男女トイレ、会議室、放送室他、そして天井部分には競技場全体を一望できるテラスが完成した。この結果、体育会競走部の練習環境が充実したことは言うまでもないが、運動会や各種競技スポーツ（ラグビー、サッカー、アメリカンフットボール、ラクロス等）の立場から見ても素晴らしい環境となった。早速今年度秋学期より体育実技の実施場所としても使用し、その履修生にとっても大変に喜ばしいことであった。日吉キャンパスの入口に位置する緑豊かなこの競技場は、まさに塾生において健康・スポーツの場のシンボルとなることであろう。初夏の早朝、さまざまな人々がマイペースでジョギングする光景を思い浮かべながら、これからの展開を模索していきたい。

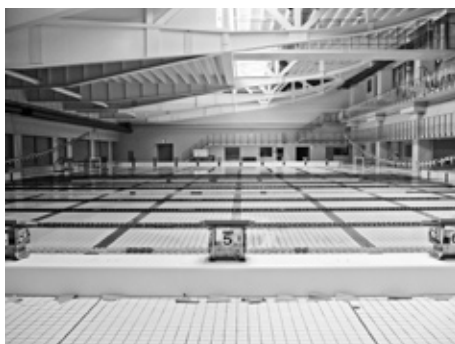
続いては慶應義塾協生館内大学体育施設についてである。慶應義塾協生館も同様として、2008年8月に完成し、三つの独立大学院の他、健康・スポーツ・文化・実業などの施設を有し、学生と世代を超えたさまざまな人々が集い交流し、連携を実現していく場として建てられた。いわゆる開放型

キャンパスの象徴として、慶應義塾内外の方々に活用して頂き、社会・地域連携を展開するのである。この7階建の協生館の地下1階部分に主な大学体育施設として、室内プール、トレーニングルーム、エクササイズスタジオがある。プールは50m プール(国内公認プール)と飛び込み専用プールの2つがあり、50m プールの約3分の1は可動床で目的に応じた幅広い利用が可能となった。完成間もなく体育会および一貫教育校の水泳部が練習に使用していることに加え、平成21年度より体育実技「水泳」等を再開講することにより、この塾内初の室内プールの存在が広く塾生に対する水泳教育の拠点となることは間違いない。また、トレーニングルームおよびエクササイズスタジオは、今年度秋学期よりそれぞれ体育実技の実施場所として使用している。両施設共に今後は授業使用以外にも活用を広め、皆に親しまれる施設としたい。

複雑化する今日、我々を取り巻く環境をよりゆとりのあるものとする必要がある。慶應義塾内外の方々にゆとりのある環境を提供することが、都市近郊としては数少ない緑に囲まれた日吉の森の役目だと考える。塾生達がメディアセンターを利用して多くの情報を得ると同様に、人々が当体育施設に立ち寄り、心身の健康を獲得してほしいものである。



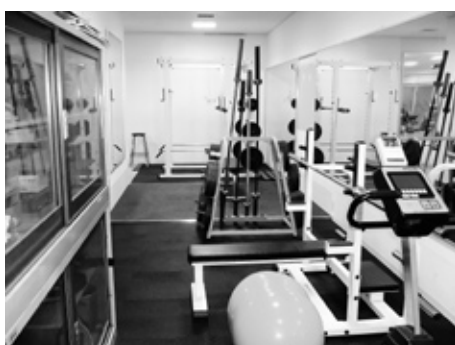
陸上競技場



50mプール



飛び込み専用プール



トレーニングルーム



エクササイズスタジオ

V. 業務活動記録

V. 業務活動記録

平成20年度総務分野関係報告

1 人事

- (1) 定年退職者
篠原しげ子君（3月31日付）
- (2) 任期満了
西村 忍君（3月31日付）
- (3) コーディネートオフィス職員の就任
石田昌美君（4月1日付）

2 塾内役職

- (1) 教職員評議員
植田史生君（11月1日～）
- (2) 大学寄宿舍舎監
近藤明彦君
- (3) 大学教養研究センター運営委員
植田史生君（所長）
- (4) 大学教養研究センター所員
近藤明彦君、松田雅之君、石手靖君、
村山光義君、吉田泰将君、加藤大仁君、
野口和行君、村松憲君
- (5) 大学学生総合センター副部長（日吉支部）
石手 靖君
- (6) 日吉キャンパスカレンダー編集委員長
野口和行君
- (7) 極東証券寄附講座運営委員
吉田泰将君
- (8) 日吉行事企画委員会（HAPP）委員
石手 靖君
- (9) 記念館運営連絡協議会委員
植田史生君、野口和行君
- (10) 立科山荘運営委員会委員
野口和行君
- (11) 日吉キャンパス公開講座運営委員会委員
佐々木玲子君（10月1日～）

3 研究所内役職の主なもの

- (1) 所 長
植田史生君

- (2) 学習指導主任
石手 靖君
- (3) 学習指導副主任
村山光義君
- (4) 総務委員会委員長
吉田泰将君
- (5) 教育委員会委員長
石手 靖君
- (6) 研究委員会委員長
村松 憲君
- (7) スポーツ振興委員会委員長
野口和行君
- (8) 将来構想委員会委員長
石手 靖君

4 スポーツ棟（体育研究所・卓球場）の竣工と記念シンポジウムの開催

昨年度末の3月28日に竣工式が執り行われ、実質的には今年度より新棟において活動が開始した。これを記念し、6月15日には「体育研究所新棟完成記念フォーラムを開催した。内容の概要は次のとおり。

シンポジウム1：「東・京・早・慶」これからの健康・スポーツ科学を考える」と題し、東京大学、京都大学、早稲田大学、慶應義塾大学の各大学からパネリストを招いた。

シンポジウム2：「慶應義塾のスポーツ教育を考える～義塾150年によせて～」と題し、塾内者（常任理事、文学部長、教養研究センター所長、体育研究所教員）がパネリストとなった。

この他に「未来先導と体育・スポーツ」と題する塾長の講演と、「体育研究所の使命」と題する体育研究所所長の講演が行われた。また終了後、ファカルティークラブにてレセプションが行われ、多数の方に出席を頂いた。

詳細については報告書を参照されたい。

5 協生館の竣工

8月6日に竣工式が執り行われた。体育研

研究所が直接管理する施設としては、地下1階にトレーニングルーム、エクササイズスタジオ、教員室がある。早速秋学期より授業で使用を開始した。

6 蝮谷体育館（仮称）の新築工事

当初今年度内に着工し竣工する予定だったが、文化財調査が必要となったため、着工、竣工とも遅れることになった。このため春学期の授業は、取り壊しを延期した記念館で行い、秋学期の授業の内、体育館科目は実施しないことになった。

（主事 富山優一）

平成20年度活動報告書

平成21年 7 月 1 日発行

[非売品]

編 集：活動報告書編集委員会

吉田 泰将（委員長）

松田 雅之 村山 光義 加藤 幸司

奥山 静代 鳥海 崇 牛山 潤一

森下 愛子

発 行：慶應義塾大学体育研究所

〒223-8521 横浜市港北区日吉 4 - 1 - 1

制 作：(有)梅沢印刷所

〒108-8345 東京都港区三田 2 - 15 - 45

